【授業記録】

基地に消えた村

嘉納英明*

A part of Ginowan village was taken over by US military forces as their base of Futenma.

KANO Hideaki

内　容

１．総合学習で「基地に消えた村」に取り組む
２．戦前の宜野湾村に注目したいきさつ
３．戦前の宜野湾村の姿
４．記録１　子どもが語る戦前の宜野湾村－神山の集落・並松街道・軽便鉄道・安仁屋の集落・祭と行事・事件と事故－
５．記録２　元村民の証言を聴き録る
　１）字宜野湾の生活
　２）字神山，字安仁屋の生活
　３）宜野湾並松・市場・軽便鉄道・事件
６．記録３　金城功さんと軽便鉄道について語り合う
７．記録４　佐喜眞昇さんと字神山について語り合う
８．制　作 ＜大型紙芝居＞基地に消えた村－るん太とクロの探検－
９．むすび－宜野湾村の姿に迫った子どもの学びとは何か－

１．総合学習で「基地に消えた村」に取り組む

平成14年度から「総合学習」が導入された。小学校３年生から高校生までの子どもたちが，自分で調べてみたい，追究してみたい課題を見つけ，これを解決するための方法を考え，様々な解決方法を使って解き明かしていくという，これまでの学校の学習内容とはひと味違った学習が入ってきた。年間で105～110時間の授業時数であり，週３時間ほどの授業である。現在，学校で学んでいる算数や国語などの教科は，あらかじめ学習内容が定まっていて，しかも教科書がある。これらの教科について言えば，書店に行けば参考書や資料集などもバラエティに富み，なんとなく取り組みやすい感じがするが，「総合学習」は，教科書はもちろん，参考書や資料集，あるいは手引きとなるものは，厳密に言えば，そろっていない。個々の子どもが自分

*琉球大学教育学部附属小学校教諭

なりの課題を見つけることに意味があり，しかもそれを自分自身で，あるいは，仲間と共に解決していく方法が求められているのだから，あらかじめ学ぶもの，学ぶべきものと準備された教科書の類は，ないのである。したがって，「総合学習」の創設は，教師にとっても子どもにとっても心待ちにされていたものであると同時に不安が入り交じるものである。「総合学習」は，学校や教師，子どもたちに活動内容は任され，創意工夫に満ちたユニークな学習活動が期待されているのである。実際，全国の学校においては，地域の課題や子どもの問題意識から出発した「総合学習」が展開され，着実に実を結んでいる。

私は，この「総合学習」は，教師と子どもが協同的に学びたいとする課題を共にとらえ，追究していく時間を共有することのできる魅力あるものであると考えている。平成15年度，琉球大学教育学部附属小学校の６年生の担任として，子どもと共に，かつて普天間基地のなかった頃の戦前の宜野湾村（現在の宜野湾市）で生活していた人々の暮らしぶりや集落の様子について学ぶ機会を得た。普天間基地が形成される前の集落（字）に焦点をあて，そこに生きる人々の生きざまに迫り，基地に呑み込まれた村の人々の姿を子どもの視点から再生することで，郷土・沖縄に対する思いや願いを深め，地域への愛着心を育みたいと考えたのである。

本稿は，なぜ，戦前の宜野湾村に注目したのか，そのいきさつから書き始め，また，読者の理解を助けるために戦前の宜野湾村の輪郭をスケッチした。「記録１　子どもが語る戦前の宜野湾村」は，宜野湾村について調べてきた子どもの中間報告会の模様である。ここでは，いかにも小学校の教室で授業参観しているような気分で，臨場感あふれる，子どものやりとりを味わって欲しい。話し合いの中で特に大切なことがらについては，囲み記事にした。

「記録１」で浮き彫りになった子どもの疑問や課題点は，「記録２　元村民の証言を聴き録る」に引き継がれる。図書館の本や資料，部分的な聴き録りだけでは明らかにできなかった点が，元村民に対する子どもの聴き録り調査によって明らかになっていく。インスタントカメラやデジタルカメラ，録音機器を準備しての聴き録りである。聴き録った録音テープを文章化し校正するという地道な活動を子どもたちは続けた。「証言者が，皆さんに語っているように文章化していくことが大切だ。」と話し，子どもは補足的な説明を付け加えたり，再度，聴き録りをしながら，基地の中で生活していた人々の証をまとめた。

「記録３」は，沖縄大学非常勤講師の金城功さんを招待し，意見交流の場を設けた。学級の子どもの約１／３が宜野湾村に通っていた軽便鉄道に関心をもち，追究活動をしている中，研究者との交流を通じて，軽便に対する幅広い知識や見識にふれ，学ぶことの面白さを子どもたちに肌で感じとって欲しかったからである。金城さんには，軽便鉄道に関する子ども相互の意見交流の場面の参観後，子どもの質問に答えて頂いた。

「記録４」は，基地に呑み込まれた村（神山）について学んできた子どもの報告及び交流会である。この交流会には，宜野湾市立博物館長の佐喜眞昇さんに参観して頂いた。

「制作」は，「総合学習」のまとめとして制作した紙芝居のことである。主人公・るん太が戦前の宜野湾村にタイムスリップし，そこで様々なひとやモノと出会い，村の様子をるん太の視線で描いている。当然，ストーリーから紙芝居の絵の構成に至るまで，子どもの調べた内容が反映されている（次頁「基地に消えた村」の活動プラン，参照）。

「記録１」から「制作」は，子どもの学びの軌跡であり，これらを総括する意味で，「９．むすび－宜野湾村の姿に迫った子どもの学びとは何か－」をまとめた。ここでは，基地に消えた村を総合学習のテーマに据え，ほぼ一年間かけて追究してきた子どもが，何を学び，どのような力を培ってきたのかについて考察した。

――「基地に消えた村」の活動プラン（全45時間）――

ねらい 普天間基地が建設される前，そこは，宜野湾村と呼ばれ，集落（字・ムラ）があった。村内に住む人々の生活の様子や伝統行事，自然環境などについて追究し，子どもの視点から集落の実像に迫ることで，郷土に対する関心と愛着，共感的な態度を培いたい。

ふれる　はたらきかける　発信する　いかす

五月　六月　七月　夏季休業中　九月　十月　十一月　十二月　一月　二月

①昔から，普天間基地はあったのか。普天間基地ができる前は，何があったのか。

⇓

②何をどのように調べていくのか，活動内容と追究方法について話し合う。

⇓

③安仁屋に住んでいた方から，戦前の宜野湾村内について話を聞く（共通学習）。

⇓

④個々の追究課題をもとに，グルーピングを行う→追究の見通しと方法について話し合う。

⇓

⑤宜野湾市立博物館を見学する（共通学習）。

⇓

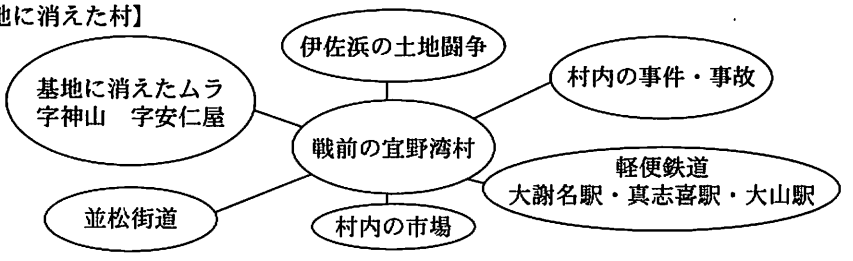
⑥追究課題に応じた方法を考え，活動を展開する。

○宜野湾市立博物館見学と職員へのインタビュー
○宜野湾市役所文化課職員へのインタビュー
○戦前宜野湾村に住んでいた方々へのインタビュー
○宜野湾村の遺跡を歩く（駅跡・軽便橋・宜野湾並松跡の今・基地に消えた安仁屋集落）

⇓

⑦インタビューした内容を文章としておこし，まとめる。

【基地に消えた村】



⑧子どもが思い描く戦前の宜野湾村（中間報告会）

⇓

⑨意見交流会Ⅰ（金城功さん－沖縄大学非常勤講師）

⇓

⑩意見交流会Ⅱ（佐喜眞昇さん－宜野湾市立博物館長）

⇓

⑪宜野湾村の遺跡を歩く（駅跡・軽便橋・宜野湾並松跡の今・基地に消えた安仁屋集落）

⇓

⑫発信活動に向けて（ポスター作り）・まとめ方，方法の検討　・資料，情報の取捨や整理

⇓

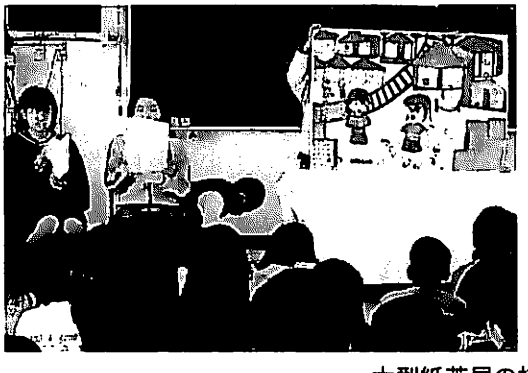
大型紙芝居の制作と発表

⇓

今までの活動を振り返り，今後の活動に生かす。

大型紙芝居のストーリーを話し合う

ストーリーをもとに紙芝居を制作



大型紙芝居の校内発表会の様子

2．戦前の宜野湾村に注目したいきさつ

戦前の宜野湾村に注目したきっかけとなったのは，社会科の授業であった。6年生の社会科では，日本国憲法を学習するが，私は，憲法と沖縄の基地を関連させた授業が仕組めないかと考えた。つまり，沖縄の基地の教材化である。

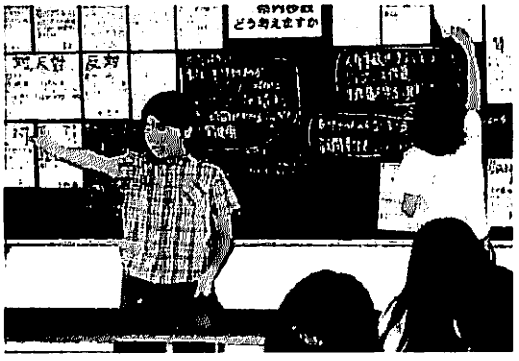
国土面積のわずか0.6％しかない沖縄に，在日米軍基地の75％が集中している事実。特に沖縄島には，極東最大の米軍基地である嘉手納飛行場が鎮座し，同飛行場の南側には，県内移設問題で揺れる普天間基地（宜野湾市）がある。学級の子どもの半数が宜野湾市から通い，普天間基地を身近に感じている実情から，これを地域素材のひとつとしてとらえ，教材化できないかと考えたわけである。当然，普天間基地をめぐる問題として，爆音問題，墜落事故の危険性，県内移設問題についても取り上げ，これらは，日本国憲法の平和的生存権との関連で追究させたかった。この授業の目標は，「戦後，日本国憲法が制定され，民主的な改革が行われたことについて理解し，平和で豊かな世界を実現していくためには，沖縄の基地問題を始めとする国内外の残されている諸問題に気づくことができるようにする」である。子どもたちは，『あたらしい憲法のはなし』（文部省作成）の挿絵から，「戦争放棄」の考えを読み取り，日本が独立を回復したものの，沖縄が引き続き米国の直接支配下におかれ，基地建設が進んだことについて関心をもった。続いて，日米両軍の熾烈な戦闘があった嘉数高台から普天間基地を展望し，同時に，基地の歴史と機能，役割，問題について市役所の基地渉外課職員の説明を聞いた。宜野湾市の面積の25％が基地に占められ，基地と隣り合わせで生活している市民の実態を子どもたちは実感したのである。

子どもたちは，米軍基地の建設のために強制的に土地が取り上げられたこと（土地闘争）や石川市の宮森小学校にジェット機が墜落した事件について調べたり，具志川市川崎の墜落事故に遭遇した方への電話インタビューにより，沖

縄の基地被害の実態に迫った。こうした学習活動を通して，基地をめぐって様々な事件・事故が起こったことや未だ解決の見通しがついていない問題があることにも気づいていったのである。子どもたちが基地をめぐる今日的な問題として話し合いの末に集約したのは，普天間基地の県内移設問題であった。子どもたちは，普天間基地の県内移設問題について次のように考えた。

- 町の真ん中に基地があって飛行機の墜落事故があると大変だ。
- 安保条約があるので基地を海外に移すのは無理だ。
- 名護市の辺野古沖はサンゴやジュゴンがいるので反対だ。
- 県内移設問題自体に反対。安保条約があっても日本国憲法を第一に考えるべき。

移設問題をめぐってそれぞれの立場から意見をたたかわせ，沖縄の基地問題が複雑で難しい問題だということをあらためて認識したのである。子どもが出した結論は，「普天間基地は名護市に移設しないで，事故や事件が起こらないようにするように努め，安保条約についても見直していく」ということであった。（詳細は，嘉納英明「日本国憲法と沖縄の基地問題」『教育』№710，国土社，2005年３月，100～107頁を参照のこと）。



普天間基地の県内移設問題を考える

ところで，普天間基地の学習の中で，子どもの関心をひいたことは，普天間基地の建設以前，そこには集落があり，豊かな農業地帯であったという事実である（副読本『わたしたちの宜野湾市三年』参照）。大正期，宜野湾市は，宜野湾村とよばれ，14の集落から形成され，大豆やさつまいも，米，田いもなどが栽培されていた。また，ケービン（軽便）鉄道が走り，村内には駅もあったのである。戦後，米軍により強制的に土地が接収され，基地が建設されたことで，そこに住んでいた人々が立ち退きされ，村内にあった，神山，新城などの集落は，基地に呑み込まれ，消えた。この事実は，「昔から基地があった」と考えていた子どもを大いに揺さぶるものであった。

そこで，私は，普天間基地の歴史をさかのぼり，昔の村の姿に接近することが大切だと考えた。普天間基地内にあった村（集落）の名前と場所を資料で調べたり，関係者の話を聴いたりすることでイメージをふくらませ，また，基地周辺に見る村の面影をフィールドワークをして発見したり，確かめたりするのである。基地に消えた集落に住んでいた方々を特定し，聴き録りを通して村に伝わっていた伝承文化や芸能，豊かな自然環境について気づかせたい。それは，普天間の固有の社会，風土，文化などについてそこに住んでいた人々の記憶を共有することでもある。現在，基地の外に住む元住民の願いと子どものそれをつきあわせることは，今後の普天間基地のあり方を考える大切な学習活動となるはずである。また，『今・昔の普天間～新しいまちづくりを目指して～』（企画・内閣府沖縄総合事務局，平成13年度）のVTRも大いに参考になった。これは，基地がなかった頃の昭和の宜野湾をGIS（地理情報システム）とCG（コンピュータ・グラフィック）を駆使して再現したものである。子どもが追究してきた基地がなかった頃の普天間像とCGにより再現された普天間を重ね合わせることも刺激的である。

巨大な基地の壁に阻まれ，これまで見えなかった村の実像が，子どもの追究活動を通して少しずつ浮かび上がってきたことは喜びと感動を与えた。また，基地内に確かにあった村の伝統や行事，自然環境が基地建設により消えてしまったことに対して，子どもたちは，あらためて郷土に対する愛着と共感を感じたのである。

3．戦前の宜野湾村の姿

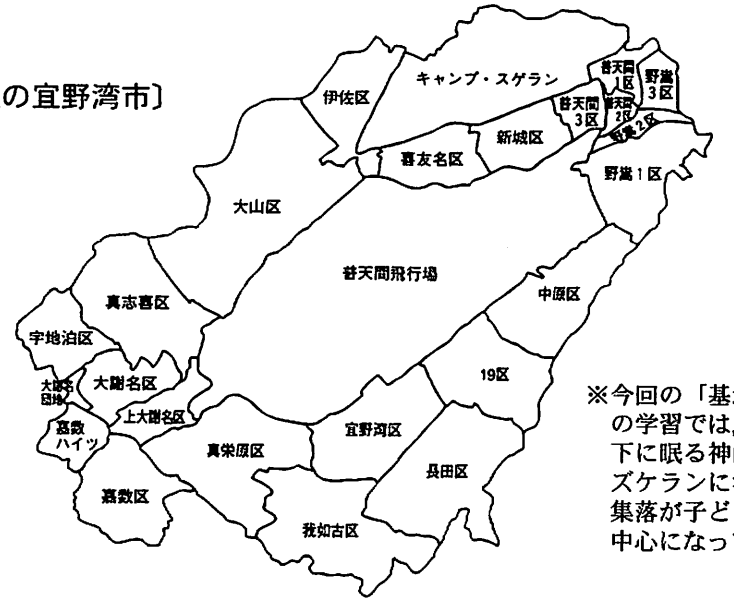
宜野湾市は，1671年に14の村（野嵩，普天間，安仁屋，新城，喜友名，伊佐，大山，真志喜，大謝名，宇地泊，嘉数，我如古，宜野湾，神山）で構成する，宜野湾間切（間切：現在の市町村の行政区域）として出発した。明治時代前後には，首里や那覇に住み，琉球王府に仕えていた士族層の人々が地方の農村に移り住むようになったのである。これらの人々のことを屋取（ヤードゥイ）と呼び，宜野湾間切はもちろんのこと，現在の北谷町や具志川市などにも数多くの屋取があった。宜野湾間切では，真栄原，佐真下，志真志，長田，愛知，中原，赤道，上原がそれにあたる。1908（明治41）年には，「沖縄県及島嶼町村制」の公布によって，これまでの間切という呼び方から町・村の名称が使われ，宜野湾間切も宜野湾村となった。宜野湾村では，昭和10年代に屋取部落が旧部落の14行政区から独立していき，沖縄戦前には22行政区となった。村内には，南の嘉数から北の普天間宮までの約5.8kmにわたって2,900本余の松並木がのびる，宜野湾並松（ナンマチ）があり，1932（昭和７）年には国の天然記念物の指定を受けた。「普天間宮略記」によれば，首里から普天間への道は，王の参詣道として，さらに17世紀後半に宜野湾に寓居（かりずまい）していた尚貞王（1645～1709）の世子，尚純（1660～1706）によって普天間宮から浦添の沿道に松並木が植えられ，宜野湾並松，普天間街道などと呼ばれた，とある。その宜野湾並松も戦災と戦後の松食い虫の被害を受け消失した。また，村の西側は那覇から嘉手納までの軽便鉄道が走り，村内には，大謝名・真志喜・大山の３つの駅があった。大山駅は有人駅，他の二駅は無人駅であった。

戦後，部落によっては戦前までの居住地が普天間飛行場とキャンプ・ズケランの米軍基地に接収され移動を余儀なくされた。なかでも，安仁屋部落は，キャンプ・ズケランに接収され，行政区域名も消滅し米軍基地下に眠る村である。また，戦前，宜野湾並松街道沿いの闘牛場で賑わった神山部落は，大部分の元の居住地は，普天間飛行場下にある。1964（昭和39）年，行政区再編で愛知区と合併し19区となった。

【参考図書】

・宜野湾市教育委員会文化課編『ぎのわん市の戦跡（第２版）』2003年。
・宜野湾市教育委員会文化課編『自然とヒト』2003年。
・宜野湾市教育委員会文化課編『ぎのわん自然ガイド』2002年。
・「普天間宮略記」（普天間宮より入手）

〔現在の宜野湾市〕



※今回の「基地に消えた村」の学習では，普天間飛行場下に眠る神山，キャンプ・ズケランに消えた安仁屋の集落が子どもの追究活動の中心になっている。

4．記録1　子どもが語る戦前の宜野湾村
－神山の集落・並松街道・軽便鉄道・安仁屋の集落・祭と行事・事件と事故－

2003年9月，「総合学習」の中間報告会と称して，これまで調べてきたことを学び合う機会をもった。神山や安仁屋の集落の様子や並松・市場のこと，村内を通っていた軽便鉄道，村内の事件のことなど，子どもが追究してきた多様なテーマとそれについての学びを出し合い，意見交流の場とした。以下，いかにも小学校の教室で授業参観しているような気分で，臨場感あふれる，子どものやりとりを読み取って欲しい。進行役は，みちるさんである。

神山の集落

あ　き　神山は10世帯ぐらいあって1世帯につき10人から12人ぐらいの家族だったそうです。それと，先祖代々の土地がたくさんあって，新しい土地も多いところだったそうです。

み　お　1世帯に12人ぐらい？　そんなにいたんだ。

さ　ほ　神山では農業がうまくいっているということがわかって，なぜうまくいっているのかを調べたら，神山には，多くの共同の井戸があって，そこからきれいな水をひいて，食物を育てていたことと，さっきあきさんが言っていたんですけど，先祖代々の土地を受けついでいたので，1人1人，広い畑で野菜を栽培していたことが，農業がうまくいった理由だということも聞きました。

たいち　共同の井戸というのは他の集落には，なかったのですか？

さ　ほ　それについては，まだよく調べていないんですけど，たぶん宜野湾にそういう共同井戸がたくさんあって，神山にもあって，神山はその共同井戸がほかの村よりたくさんあったんじゃないかと思います。

みちる　神山のことについて他に何か知っている人，お願いします。

ひとし　沖縄には昔から台風がよく来るよね。台風が過ぎ去った後に，並松まで行って，あの松の葉っぱを取って，まき代わりに火をおこしたりして，料理を作っていたそうです。

あきひと　ひとし君の報告に付け足しですけど，松の葉はよく燃えるから，それを燃やして米やイモを炊くときに使っていたというのを聞きました。

たかふみ　枯れていなくても，何日か外に出して枯らしてから使っていた，と聞きました。また，昔，神山は，基地にとられるまでは宜野湾のほぼ中心にあったんだけど，基地にとられてからは，その周りのフェンス沿いのほうに家を建てて住むようになったそうです。

〔神山〕　宜野湾並松街道沿いにあった闘牛場は，神山の自慢のひとつであった。神山の中心部には，赤瓦葺きの村屋（ムラヤー）があり，製糖小屋（サーターヤー），共同の泉，クムイ（ため池），ウタキなどがあったが，すべて戦争で燃えた。元の神山は，普天間基地内にあり，1964（昭和39）年，行政区再編で愛知区と合併し19区となった。

並松街道

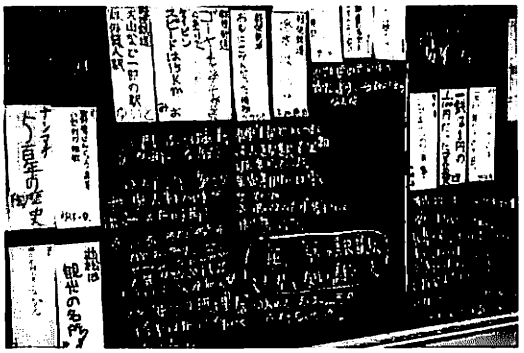
きりこ　昔の宜野湾尋常高等小学校の校歌の中に，「国宝ナンマチ青々と」という言葉があって，小学校の時からその並松のことをみんな知っていた。つまり，小学校の頃から，並松のこともちゃんと勉強していたそうです。

みちる　宜野湾尋常高等小学校の校歌の中に並松についての歌詞があって，それで，小学生の時から並松のことは，みんな知っていたということですね。

ゆうき　その並松は今から数えて500年前に作られたそうです。

みちる　500年経っていた？その500年の歴史の中で何か出来事はなかったのですか？

ゆうき　途中で松が枯れたりして，植え換えと



黒板に書き出された子どもの学び

かがありました。

ひかり　植え換えとかは主にどういう人たち，だれが行ったのですか？

ゆうき　周りの住民が強引に働かされたらしいです。

あやか　並松は500年の歴史があると聞いたんですけど，植え換えとかしたら，それってまた０から数え直すんですか？

ゆうき　最初に植えられてから500年と数えています。

み　お　並松は，観光の名所でした。その並松の隣の広場に市場があって，ほかの所から来た人たちが土産とか，また，景色がきれいだったから写真などを撮ったりしていたそうです。

ゆ　い　景色がきれいって言っていたんだけど，並松の側は畑だったんでしょう？

み　お　松の並びがきれいだったんだと思います。

まさき　普天間朝英さんから聞いた話では，並松の長さは，4.5kmから５kmだった，という話を聞きました。

きりこ　正確には，5,272mでした。

みちる　付け足しの説明ありますか？

ゆうき　並松は，普天間神宮から首里の方まで続いていました。

きりこ　あっ，首里までではないよこれ。首里までの長さが5,272kmではないよ。宜野湾だけの長さです。

みちる　並松が宜野湾にあったまでの長さが，5,272m，首里までの長さまでいくともっとある？

きりこ　うん，もっとある。

あきひと　なぜ，並松は，首里まで続いていたのですか？

み　お　首里から普天間神宮まで並松があったのは，首里の王様が元日とかにお参りに行くための道に使われていたからです。

たいち　並松街道には3,000本から3,300本の松が植えられていました。

あやか　たいちさんは松の数が3,000本ぐらいあったって言ってたんですけど，植え替えとかしていたら，2,000本とかに減ったりしなかったんですか？

たいち　多分，１本が枯れて同じところに植えるから，2,000本に減ったりとかはないと思う。

のぶたか　松の本数が3,000本から3,300本ってあるんですけど，それはどこからどこまで植えられていたんですか？

きりこ　宜野湾の普天間神宮から宜野湾村の端っこまでかな。宜野湾街道には，松はあるけど首里まではのびてなかったと思う。

ひとし　王様の道だったって言っていたけど，王様だけしか通っちゃいけなかったの？

み　お　王様だけの道だけでなくて，平日は学生さんとか，荷物を運ぶ人とか，いろんな人とかが通っていた道なんだけど。王様が来るときやお祝いをするとき，お参りをするときとか，そういう大切な日は王様の家来が大勢来たらしい。多分，王様は，毎日通ってたわけではなくて，元日とか大晦日とか，みんなが，普天間神宮に行ったりするときとかに通っていたと思います。

担　任　並松街道について，他に質問がある人いませんか？

あ　き　あやかさんは，並松街道周囲にある市場で，米や酒を売っていたと書いているけど，もう少し，詳しく説明して下さい。

あやか　米やお酒っていうのは，今のたばこみたいに，許可が下りないと市場の中では売ることができなかった。

担　任　なるほど，許可が必要。市場で売ると言っても，お酒とか米は許可が必要ってことだね。

あきひと　許可をとるっていうのは，どこに許可をとるんですか？

あやか　役場の方から許可をもらうと思う。

のぶたか　役場のどういう人達に，今だったら何々課とかあるんですけど，どういう人達に許可をとったんですか？

あやか　そこまでは分かんないけど，今でも許可を取る所があるので，役場にもあったってこと。

けんいち　なぜ，許可をもらわないといけないんですか？

あやか　お酒はとにかく年齢制限があったんじゃないかということと，お米はあまりにも貴重だから，高く売ったり買ったりとかしてたら困るから，ちゃんと許可をもらう必要があった。

み　お　普天間の土はマージと言って，赤土のことなんです。そのマージの土で作ったイモはおいしくて，評判が良かったらしい。西原の方で作った，ジャーガルって言うネズミ色の土は，たくさん作れて豊富なんですけど，水っぽくて。市場にもジャーガルで作ったイモがたくさんあったんだけど，なかなか売れなくて困ったみたいです。

あやか　だいたい植えてたものはサツマイモなんです。マージの場合は，雨とか梅雨の時期になったら，少し水っぽくなって，評判が落ちる時もあるし，ジャーガルのイモは，雨が続いた時には全く良くなかったらしいです。時期によってイモの価値が違うということがわかりました。

ことね　市場には葉野菜も相当売られていたようです。もちろん，自分の畑で作った野菜を市場で売りに出していました。

担　任　自分の畑で作った葉野菜がいっぱい，市場の中で売られてたということだね。並松街道について調べた人で他の報告はありませんか。

きりこ　野菜の市場と肉の市場が分かれていて，野菜の市場は宜野湾村宜野湾にあって，肉市場は普天間にありました。

あやか　今の普天間高校から神社に行く所とか，神社の周りは，普天間市場と呼ばれていて，そこでは肉とかも売ってたらしい。５月４日の「子どもの日」とかは，玩具も売っていたそうです。

み　お　きりこさんが言っていたように，市場は，馬場がある所，宜野湾村の役所がある所に野菜の市場があって，あやかさんが言ってたように，肉の市場とか，子ども向けのおもちゃとかお菓子とか売ってるのは普天間市場でした。５月４日になった時に，軽便に乗って那覇まで買いに行く人もいれば，近くの普天間市場で買う人もいる。野菜の市場には子どもに人気のあるような物はなくて，当時は遊び道具はあんまり売ってなかったから，旧の５月４日の子どもの日には，親が子どものために軽便で買いに行ったり，普天間市場に買いに行ったりしたそうです。

担　任　どういった玩具があったんだろう？

あやか　女の子はまりつきのまりとか，羽つきの羽とか，男の子は駒とか。

ゆうき　まいさんが書いたカードには，大きな祭典があるって書いてあるんですけど，どんな祭典ですか？

ま　い　大きな祭典というのは，旧暦の９月15日の例大祭のことです。

きりこ　例大祭は，人々の幸福のために祈りを捧げる祭りで，その日は那覇の王様も一般の人も，たくさんの人が集まったみたい。

話は変わりますが，役場の周りが中心部で，一番にぎわってた所でした。郵便局が１軒，普天間に床屋が２軒，菓

子屋が１軒，酒屋が１軒。商店が４軒ぐらいあって。普天間神宮の辺りには風呂屋があった。風呂屋は普天間神宮の所とあと１つ，２つあるんだけど，普天間神宮の所に１つあって，あと１つは分かんない。酒屋の名前は島袋酒屋。

けんいち　市場で働いていたことに関連するんですけど，当時は働いていたって言うよりも，自分達で今のフリーマーケットみたいに売っていたということなんですけど。20歳前後の女の人達が，※ガンシナっていうのを頭に乗せて売りに行って，男の人達は許可をもらって米とかを売っていた。

※ガンシナ…女性が荷を頭に乗せて運搬する際に用いるリング状の敷物。素材の稲わらを頭の大きさより少し小さめにリング状に丸く作る。

〔宜野湾並松街道〕　かつて宜野湾村内には，南の嘉数から北の普天間宮までの約5.8kmにわたって2,900本余の松並木がのびる，宜野湾並松があった。1932（昭和７）年には国の天然記念物の指定を受けた。「普天間宮略記」によれば，首里から普天間への道は，王の参詣道として，さらに17世紀後半に宜野湾に寓居（かりずまい）していた尚貞王（1645～1709）の世子，尚純（1660～1706）によって普天間宮から浦添の沿道に松並木が植えられ，宜野湾並松，普天間街道などと呼ばれた，とある。その宜野湾並松も戦力資材で伐採され，また，戦後の松食い虫の被害を受け消失した。

軽便鉄道

たかひろ　軽便鉄道は，第２次世界大戦までは盛んだったそうです。

たいち　戦争が終わったら盛んではなかったんですか？

たかひろ　戦争で軽便鉄道は完全に壊されました。

いちろう　駅弁が売られていた所は，大山駅など一部だけで･･･，大山駅以外にもいろいろ駅弁があったみたいだけど。ゴーヤーチャンプルーは人気だったらしい。

みちる　駅弁の中にもいろいろ種類があったけど，ゴーヤーチャンプルーが一番人気だったんだね。

あきひと　駅弁の値段はどれくらいでしたか？

あいり　安仁屋では，約20銭だったそうです。

みちる　安仁屋の弁当の値段はわかったね。だいたい20銭だったそうです。

ゆ　い　大山など大きな駅以外は駅長もいなくて，無人駅で，店などもなかった。有人駅は店とかもあったらしいけど，これといってお菓子など特別なものは売っていませんでした。

たかふみ　大山とか那覇とか大きな町以外，大きい駅以外はすべて無人駅ですか？

のぶたか　無人駅は，お客さんとかいるんだけど，駅員というか，駅長さんとか，そういう切符を売る人はいなかった。

のりひろ　切符売る人はいなくて，軽便に乗って中で車掌さんに言って買っていたよ。

みちる　無人駅では駅内では売り買いがなかった。

のぶたか　大きい駅では，駅内でいろいろ売り買いしていたんだけど，無人駅だと，切符も買えないから，乗って降りるときに車掌さんとかにお金を払って降りていた。

たいち　軽便に乗るときのお金って，いくらぐらいするんですか？

ゆ　い　牧志から那覇ぐらいまでの距離が，24

個々の学びの出し合いと意見交流の場

銭で，この料金は１日に働いた給料の約半分の金額でした。

たくみ　大山の自治会から聞いた話では，大山の駅長は，古波蔵恵公さんという人で，駅長の息子さんの名前は，恵昭さんというそうです。

けんいち　たくみ君に付け足しで，古波蔵恵公さんは80歳ぐらいに亡くなって，今，生きていたら100歳こえているはず。

たいち　駅長には制服とかあったんですか？

しゅういち　帽子や制服はちゃんと決まっていたそうです。写真を１回見たんだけど，その写真が白黒だったからわからない。長袖。スーツみたいな感じ。

けんいち　そのスーツは，どこの駅の駅長さんでも着けていたのですか？

のぶたか　多分，みんな着ていたと思う。

みちる　駅関係で働いていた人は，みんな着ていたの？

のぶたか　パートの人は着てないよ。話は変わるけど，大山駅は，那覇－嘉手納線の大事な駅で，那覇から来る軽便も，嘉手納から来る軽便もすべて，大山で入れ替えていました。

しゅういち　主な乗客は，学生とさとうきびと，あとは，買い物に行くおばさんとかが，主に乗っていました。

けんいち　しゅういち君に付け足しです。乗客の中の学生とか毎日乗る人は，今のバス券を束にして買っているみたいに，１ヶ月分の切符を買っていました。つまり，定期券でした。

たいち　その定期券はどこで買うんですか？

のぶたか　那覇などの大きな駅で，定期券を買っていました。

たかふみ　その定期券は１枚，普通乗ってから買う券より高いんですか？安いんですか？

けんいち　インタビューした人の話では，少しは安くなると言っていました。

りんさく　昔の軽便鉄道の乗る料金と，今のバスの料金，バス賃よりは安いと思う。

けんいち　昔の軽便鉄道の値段は今のバス賃より安いっていうんですけど，24銭というのは昔で例えると，1日の給料の半分だから，今のバス賃が，1日の給料の半分ではないので，軽便鉄道の値段が高いと思う。

みちる　あの今の値段で言ったら，軽便の方がちょっと高い。ちょっとどころじゃない。かなり高い。

ゆ　い　軽便鉄道はバスよりは高いと思うけど，昔の人は，バスみたいな気分で軽便鉄道を使っていたのではないかと思う。

〔軽便鉄道〕　沖縄の軽便鉄道は，那覇（現在のバスターミナル）を起点に，①南風原，大里を経由して与那原の港まで行く与那原線（1914年開通），②那覇港まで行く海事連絡線（1914年開通），③安里，内間，大謝名を経由して嘉手納まで行く嘉手納線（1922年開通），④東風平，高嶺を経由して糸満の港まで行く糸満線（1923年開通）の４つの線路があった。1945年の戦火により停止するまで旅客列車として，また，サトウキビを運ぶ貨物列車として住民に「ケイビン」の愛称で大いに親しまれた。

安仁屋の集落

ひなこ　「ウフゲーナー」という方言が安仁屋に昔あったそうです。安仁屋は海からそう遠くはなかったけど，安仁屋の人は海に行って魚をとるのを嫌っていました。理由は，ただで魚を取って，食べることができたからで，「ウフゲーナー」をした人は，村八分にされたりしました。「ウフゲーナー」っていうのは，海で魚をとってきて，ただで，働かずに食べること，という意味だそうです。

いつき　ひなこさんに付け足しですけど，安仁屋は，海に面していて，魚を捕って生活することも可能だったけど，それは，腕を遊ばせているという意味で「ウフゲーナー」といって，あまり良いよう

には見られなかったみたい。

担　任　海に行って魚を捕って，それを売るという生活は，安仁屋では評価されなかったということかな。だから，魚を売ってなかったんじゃないかということだね。

たかふみ　ひなこさんが言っていた「村八分」って何？

ひなこ　「村八分」というのは，火事と葬式の時以外は，助けないということです。

みちる　ひなこさんといつきさんの話から，魚っていうのはあんまり庶民的な食べ物ではなかったいうことになるんですか？

担　任　今までの話を聞いてみると，庶民的な食べ物ではなかったということになるね。その辺はどうなんだろう。

きりこ　多分，市場で魚を売っているのじゃなくて，訪問販売みたいな感じで売っていたのかな。頭の上に丸いガンシナを置いて，その上に魚をのせて…。

担　任　なるほど。市場には魚はそんなになくて，おばちゃん達がガンシナにのせた魚を売りに来たということだね。

のぶたか　捕れる魚が少ないんだったら，他の場所から売りに来る人もいるだろうし，那覇とかからいっぱい魚を持ってくる人達もいるだろうから。

ひなこ　話によると，軽便よりも客馬車の方が安くて，軽便は，普天間から那覇まで25銭で，客馬車は10銭だったから，客馬車をよく使っていたそうです。

あやか　軽便の話ではないんですけど。お金に関することで，昔，「１銭まちや」というのがあって，１／100（100分の１）円で今よりも大きいパンみたいなものが買えたそうです。

みちる　今のパンぐらいのものが，１銭で買えた。じゃ，１銭は今の価値にしてみると結構していたんだね。今でいう，だいたい100円かそんなもんぐらいの価値だった。

いつき　安仁屋というところは，生活しにくい場所らしくて。イモばっかり食べていたのでは体がもたないってことで，朝は「ミーフハヤー」ていうご飯を食べて，11時に「シティミティム」ていうご飯を食べて，３時に，「アシバン」ていうご飯を食べたそうです。夜の７時か８時ごろに，ボロボロしたジュウシーとイモを２個ぐらい食べていたそうです。

みちる　１日４回食事をとっていたみたいですね。

ひとし　ある特別な日とかだったりしたら豪華な料理とかを食べたりするんですか？

いつき　お祭りがあってその時だけ，ちゃんとしたご飯が出てくる。

〔安仁屋〕　戦争前の安仁屋は，宜野湾村内で最も小さな集落であった。住民はサトウキビ，イモ，田イモなどの農産物を生産し，ウタキ，拝所，製糖小屋（サーターヤー）などがあった。戦後は米軍基地に接収され，1964（昭和39）年，行政区再編成で行政区としての名称はなくなった。

祭と行事

ひろか　麦の大祭と稲穂祭のことなんですけど。それは，一番数の多い行事で，この麦の大祭と稲穂祭は，年に３・４回あって，必ず15日にある行事で。盆踊りとエイサーのつながりは，最初，盆踊りを，首里の芸人が踊っていたのを，いろんな集落の若者達が，それを見習って，自分達で考えて作ったのがエイサーということです。

担　任　なるほどね。宜野湾村，非常におもしろいね。明治の時代に首里の芸人が踊ってたのかな？それをまねして青年達がやったのがエイサーだということですね。

しゆう　ひかりさんの，宜野湾の年中行事って何ですか？

ひかり　２月には春分の日の彼岸があると。そ

れから３月にはサンガチャー遊びと言ってね，これは女子が集落の１ヶ所に集まって，踊って楽しむと。サンガチャー遊びというのがあったと。もちろん３月の15日にはシーミー。それから，５月４日。さっき出てきたな。沖縄の方言でユッカノヒ。

みちる　ユッカノヒって，これは，豊作を祝って船を競争させる日です。

担　任　ハーリーだね。

みちる　そう，ハーリーする日で，それで，そこでお菓子を売ったりとか，そういうお祭りがある。

あやか　黒板のカードに，新城のムラあしびと網引きって書いてあるんだけど，それはどういうものですか？

ひかり　７年ごとに，虎の年，猿の年に種遊びと称して，稲の種子蒔きの日で，旧暦９月15日頃に，集落の西と北のはずれにある遊び庭で開催された。初日が衣装調べとリハーサルで，本番が３日，最終日が打ち上げで，５日間続けて行われたのがムラあしびで，網引きは，新城の網には特徴があり，め網，お網とも３本の網を接続して１本の網にできるように工夫されており，網引きの後，３本に取り外して，保管するには大変便利だったって。

しゆう　麦の大祭，稲穂祭ってなんだろう？

ひかり　麦の大祭，稲穂祭っていうのは，豊作って言うのかな，野菜とか米とか人間が食べるものを，いっぱいとれるように祭をするのです。

事件と事故

あやか　「シルークルー」という事件があって，「シルークルー」というのは，村長派と村長の反対派の考え方で，その考え方の違いで政治の争いが起こった事件です。考え方が違うと結婚もできないことがあったそうです。というのは，村長反対派と賛成派に分かれていて，村長反対派にいる人が賛成派にいる人を好きでも，家族とかに会いに行ったときに反対されて，結婚できなかったし，行事とかも同じ集落なのに半分に分かれてしまって，行事も一緒にやらなかった。

みちる　今の話に付け足しなんですけど。もともと集落が別々だとあまり結婚とかはできなかったらしい。一応村長さんの反対派賛成派関係なく，昔も一応，集落が違うと結婚できなかったりしたんだけど，そのときは同じ集落だろうが，なんだろうが，もう賛成派と反対派で結婚とか，仲間割れが激しかったそうです。また，話はちょっと飛びますが，そてつ地獄っていって，けっこう有名な話なんですけど。これは資料で調べて，かなり昔なんですけど，第1次世界大戦の時に，あの日本が参戦する前の話なんですけど，日本が参戦する前はヨーロッパがアジア市場をほぼ総取りをしていたんだけど，ヨーロッパが戦争中になって，輸出輸入をしなくなったから，日本が代わりにアジア市場にでてもう独占して，砂糖が値上がりして沖縄のさとうきび農家とかはすごくもうけて，でも，何年かたって第１次世界大戦が終わると，ヨーロッパがまたアジア市場にもどってきたから，全然輸出ができなくなって日本は困った。沖縄の砂糖が全然売れなくなって，だんだん，貧乏になってきて，しかも，台風とかの被害とかも重なって，借金とか抱えて，人々はイモとか米とかも食べられられなくなって，命を落とすかもしれない毒があるソテツを食べて飢えをしのいだそうです。ソテツっていうのは，実とか幹が食べられる植物なんですけど，でもその植物は毒があって毒をぬくっていうか，調理方法を間違えると，あの中毒を起こしたりする可能性があるそうです。実際に愛知県

の中学校で，ソテツは食べられるといって，焼いて食べたら中毒を起こしてしまって，腹痛とかを起こしたことがあるそうです。

たいち　ソテツってあれ？

みちる　ソテツっていうのは，あの中学校の運動場の通りにあるヤツ。

全　員　真ん中にダイダイ色みたいのがある。

みちる　そうそう，黄色いみたいのがある。

全　員　ねばねばするよ。虫かご作れるよ。葉っぱで。

みちる　皮を剥いで，幹の部分が食べれるけど毒がある。

たかふみ　その毒で，死んだりしますか？

みちる　この毒がひどいと死にます。さて，海外移民についてひろかさんの報告をお願いします。

ひろか　旧宜野湾村から海外移民がいつからか始まっているか明確ではないんですけど，1908年に第1回のブラジルの移民が始まって，一応県から行った人が，325名とか，そういうことを調べました。沖縄県史という本に載っていたんですけど，1935年には，フィリピンに6,229人の県民がいて，その中で宜野湾村の人が355人いた，ということを調べました。

みちる　付け足しなんだけど，ブラジルには移民者が余りに増えたからかわかんないんだけど，「ブラジル移民禁止令」というのが，県民に出たことがあるそうです。ひろかさんが言ったのをまとめると，県が貧乏だからといって，外国や内地にでる人が増えて，ブラジルとか南米の地域に移民する人はたくさんいた，ということなんですけど。また，少しかわいそうな話なんですが，お金がないということで，子どもを売ったりとか，男だけが出稼ぎにいったりとかしていたんだけど，もうそれでも足りなくて，別の安定した職ができるところを探して移民したそうです。

〔シルークルー事件〕　娘が他の字に嫁ぐ場合，「馬酒（ンマザキ）」や「家捜し（ヤーザレー）」と称して，娘の家から出身字に罰金を納める内法があった。1916（大正5）年頃，この習俗の存続をめぐって党派的な対立感情があったという。この問題は村会議員選挙の争点となり，結局，内法の存続を主張した側が選挙に勝ったが，これが「シルークルーの争い」の引き金になった。当局派を「シルー（白）」といい，反対派を「クルー（黒）」と呼んで，その後十数年間にわたって深刻な対立が続いた。

5．記録2　元村民の証言を聴き録る

1）宇宜野湾の生活

① 話をしてくれた人　玉那覇　昇さん

② 話を聞いた人　あき・ゆい・さほ

③ 話を聞いた日　2003年9月18日（木）

－昔，宜野湾村では，どんな遊びがあったんですか？

戦争の頃，ちょうど小学2年生だった。だから，私達が小さい頃の遊びは，男の子はね，木のぼりをしましたね。屋敷の周りには，たくさんの木が植えられていたからね。特に，ユーナの木やガジュマルでよく遊んだね。ただ高く登るというよりも，木の上で鬼ごっこをやったりしたよ。枝から枝へ，渡っていってね。それから陣取りもよくやった。

冬の寒い時にはね，何枚も上から重ねてゆかたを着ていたから，1枚1枚はがしてね，遊んだね。これを方言でシームナーアカセーといって男の子も女の子も1ヶ所にまるくかたまってね，その上から，みんなの着ていた着物を1枚ずつかぶせて，全部包んで分からないようにするわけね。そして中に誰がいるか名前を当てるわけ。さわったりして当てたね。中には，我慢できなくて笑ってしまって当てられる人もいたね。当てられた人は外に出るわけ。冬だから寒いよ。だからみんな中へ中へと入りたいわけね。中もみんなの体で温められているからね。これがシームナーアカセー。アカセーというのは，

「誰が入っているか当てなさい」という意味なんだけどね。それから広場ではね，缶ケリなんかもあったね。また男の子はね，あのカタツムリの殻をね，山で集めてきて，それをおたがいに持って，つぶし合いをするわけ。小さいのもあるし，大きいのもある。大きいのになると，２～３㎝ぐらいあるかね。こういうのは山の中の石の下でよくカタツムリの殻があって，だからみんな友達一緒になって，石をころがしながらね，いっぱい集めてきて，そしておたがいに持ってね，カタツムリのいちばんてっぺんのとがっている所をおたがいに合わせてね，力いっぱいおしつぶすわけ。そして，つぶれた人が負け。そんな風にして最後に残った人が「勝ち」と。

それから，粘土遊びね。パーランクーといっていたけどね。今もパーランクーってあるさ。エイサーの時に使う。粘土であんなパーランクーみたいなものを作ってね，石の上，あるいは木の板の上にね，上からバァーンと打ちつけると，あの中に入った空気が，押しつぶされて皮の部分がね，薄くしてあるから土がはね飛んでね，爆発みたいにして大きな穴があくんだ。この穴の大きさでね，誰のものが大きくあいたかということで勝負していた。このパーランクーの作り方にもよるし，また皮の部分の薄くしている部分，それにもコツがあってね。勝った人の土をもらうわけ。それで，土をもらった人は，粘土の量が増えるから大きいヤツが作れるわけね。そういうような遊びをやったり，それから粘土では，牛だとか，家だとか，兵隊さんの形とかね，そういう形を作って遊んだりしよったね。粘土遊びをする時には，粘土を取りに行かないといけないよね。小川に上質な粘土があるから，取りに行ってね。そこでも遊びがあった。粘土は取るだけじゃなくて，その川の近くで遊んでね。粘土を投げつけたり，くっつけたりしてね，それぞれが泥んこになってね。

他にも小鳥を捕まえて，遊んだ。年上の４年生か５年生のお兄さん達が鳥カゴ作りを教えてくれたね。竹で作った鳥カゴのことを，方言で，ソーミナークーと言ったけど，ソーミナーというのはね，メジロのことを言うんだよね。クーはそのカゴのことをクーといいよったね。先ぱい達がね，竹を切るのも選ぶのも教えてくれたね。あまり若い竹はダメだよとか，色もちょっと黄ばんだ方が上等だよ，といってね。そして細くこういう風に小刀，方言ではシーグと言ったかね，これで削ってね。鳥カゴを作って，それを木の上につるしてメジロがよく食べるもの，「こんなのがメジロはよく食べるよ」と言って先輩たちが教えてくれてね。木の実をむいてね，鳥カゴに入れてそれを食べにきた所をフタが閉まるようにしてね，メジロを取って遊ぶ。これはもう先輩たちも一緒になって教えてくれた遊びだったねえ。

－昔の家の様子を教えて下さい。

宜野湾の場合はね，まぁ神山もそうだね。畑と家は遠かった。わりとね，字宜野湾の場合は，区画整理がされていたように思えますね。屋敷も今私が住んでいる屋敷の大きさぐらいのが多かった。屋敷内にも，毎日食べる程度の野菜畑は必ずありましたね。また，屋敷内に家畜も飼っていた。屋敷内に，小屋を作っていましたから。豚小屋や牛小屋，馬小屋もあって，だから屋敷はただ住むだけじゃなくて，家畜を養う場所であり，毎日の野菜を作る場所でもあったから，わりと広かったわけ。

－昔，農業で働く人の様子を聞かせて下さい。

字宜野湾の農業はね，昔は先輩たちから聞いてまとめたところによるとね，うまくいってたそうです。村内では字宜野湾は豊かな農村だったそうです。そして，ヤンバル，国頭あたりは

玉那覇 昇さんの話を聞く

畑が少ないでしょ？それから「次男三男」って分かる？昔は畑や財産は兄弟の中では長男が財産を受け継いだそうです。だから長男以外の人達は畑もないからね。自分でいろいろ工夫して生活しなければいけないからそういう次男三男とか，ヤンバルのね，畑の少ない人達は，向こうに行って儲かって来ようという人が多くいたそうです。その人達がどんな風にして仕事をするかというと，畑仕事を手伝うわけ。特に地主さんは土地，畑をたくさん持っているので，家族だけではもう間に合わない。ヤンバルから来た人は，地主さんから前もってお金を受け取る。1カ年分とか，場合によっては5カ年分とか，まとまったお金を貰って，そして自分の子どもを給料の代わりにその農家において，その子どもは，農家の家で寝泊まりしながら仕事をするわけ。ずっと5年も10年も働きよったそうです。これは方言では，イリチリーというけどね。これはよくあった話だね。

－農業をする上で工夫というのはあったんですか？

これはウチの親，あるいは先輩の話なんだけどね，肥料作りはね，これは色々工夫したそうですね。どんなものが肥料として使われていたかというとね，まず，堆肥作りね。草木を腐らせてね，土の中にすりこんで豊かな土にするんだよね。これを競争させてね，商品をつけて立派な堆肥を作る競争をしたそうです。だから，各家庭では草木を集めて，積んで腐らせて，堆肥を作ったねえ。そして木灰，草木を燃やした後に残る白っぽい粉みたいなもの。あれも仮肥料といってね，肥料の要素のひとつであるわけね。だから昔の人はご飯を炊く時に使うカマドの薪を利用して，燃やして，またその燃やした後に出てきた木灰を細かくしてね，畑に肥料として入れましたね。それから，チッソ肥料はね，あの便所の排出物をね，ためて腐らせて，これを畑にかけてね。だから，昔は，排出物が大事だから，道ばたにはやらなかったわけ。それからアンモニアチッソ肥料は，馬，牛の家畜の排出物だったそうです。でも，足りない時は，池に排出物をためておいたって。海水を桶にくんできて，池の水と混ぜると，早く腐ったようです。この時，海にいる食べ物にならない小動物も一緒にくんできてそれも全部混ぜて肥料を作っていたそうです。

それから耕す時には，「イーグーナー」（ユイマール）というので畑仕事が行われていたそうです。ユイマールは，特に力仕事ね，さとうきびの収穫とか植えつけね。また，集団でやると，競争心が出てくるから能率が上がる。1人でやるより，近所で競争しながらやった方がいいと思ったから，それでユイマールをよくやったそうです。畑を耕したり，収穫したりする忙しい時期に，こういう工夫をね，昔の人は，やったみたいですね。

－家で飼っていた家畜の種類等についてもう少し教えて下さい。

豚は各家庭にいたようですね。あと，ヤギ。そして牛ね。馬は各家庭にはいなかったね。豊かな農家にはいたけど。各家庭には，ブタ，ヤギ，牛はほとんどの家庭にはいたでしょうね。数は各家庭で2～3頭ぐらいいたでしょうね。また，子豚専門で豚を飼っている所もあったね。上等な母ブタを探してきて，それに子豚を産ませて乳離れしたら，売るという感じで，それを専門に行っていた所もあったそうですね。ヤギもほとんどの家庭で飼っていましたね。あとニワトリね，ニワトリもほとんどの家でね。でも，ニワトリはそんなにたくさんではなくてね，放し飼いでした。エサなんかも特にやるんじゃなくて，自分で探して，でも大きな農家では小屋を作ってエサをやっている所もあったかもしれない。卵をどこに産むかわからないから足に長いヒモをつけていたそうです。どこに隠れているのか分かるようにしていたよ。

－どんな農作物を作っていたのですか。

さとうきびが1番大事な農作物だった。あとは，サツマイモ。サツマイモといってもたくさんの種類があったよ。今の時代の紅イモのようなものもあった。それから大豆ね。大豆から豆腐を作っていた。特にさとうきびは，一番の現金収入源だったね。だから砂糖は作っても，自分達は食べないね。これは売り物だから。でも，

病気した時とか，食欲がないとかちょっと栄養補給しなければならんなぁ，という時には砂糖をなめさせる。

僕は，戦後の話だがね，この砂糖を隠してある場所を見つけてね，こっそり食べていたことがある（笑）。どこに隠してたかというと，大豆を入れてある壺，「カーネー」ていってね，この壺に大豆を保管してあるんだが，その深いところに砂糖をおいていたわけさ。普通，砂糖は，そのままおいておくと湿気でネバネバしてしまうので，長く保管できないから，この大豆の壺の中に入れておくわけさ。大豆が湿気をすうからね。だから，いつも乾燥した状態で砂糖や黒砂糖が保管できたんだ。僕は大豆の壺の中に砂糖があることを知っていたから，少しずつ少しずつ…（苦笑）。

砂糖の話と言えば，イジメの話になるかな。ケンカの強いボスがね，「砂糖持ってこい」と言うわけね。強いヤツにそう言われたらもう恐いからね。こっそり家から砂糖を盗んであげるわけ。ボスもまた，自分１人では食べないで，友だちにもあげるわけね。黒砂糖の固まりを持ってね。「これだけだよー」と言って，指で印をつけるようにして子分に差し出すんだけど，時には指までかじられることもあって，「アイタタタ～」して（笑）。

－普段，どんな食事をしていたんですか。

サツマイモが主食。今のお米と同じようなもの。だからこれはもうどこの家でも栽培していた。サツマイモは植えて３～４ヶ月ぐらいで食べられるからね。食事の時にはサツマイモをテーブルの上に積んでね。あとは味噌汁。味噌汁といっても野菜だけ入っているもの。野菜はトウガン。方言でシブイというでしょう。大根，ニンジン，菜っぱ等を入れていたね。おやつもイモ。弁当もね，このサツマイモを３個か４個ぐらい，ハンカチにくるんでね。だから，朝・昼・晩それから弁当もイモ。遠足の時にはね，お米の弁当があった。丸い大きいおにぎり，中に味噌入れてね。バナナの葉っぱで包んでね。サツマイモは沖縄の人の主食だったね。沖縄の人たちの命を救ったのがイモだね。昔は強い台風がいっぱいあったから，台風で農作物がダメになっても，イモは３ヶ月ぐらいでは食べられる。

サツマイモとさとうきび，それと大豆ね。その他には小豆も作った。穀物はほとんど作った。広い畑を持っていて，植えつけるゆとりがある所では，小豆や麦とか，里芋とかも作っていたね。大豆を作っていたから，味噌も自家製で作っていたさ。豆腐もね。お祝いの時には，必ず豆腐。食べ物の話はどっかで調べてるかもしれんけど，唯一のタンパク源は，豆腐だったね。

－昔の家の造りで面白い所はなかったですか。

宜野湾独自の家造りというのは，よくわからないけど。戦前，字宜野湾は他の字に比べて瓦葺きの家は多かったといいますね。でもほとんどの家は，茅葺きの家。茅葺きにも種類があって，生活が中くらいから上の家では，「ダキガヤ」といってね，ヤンバルの山に生えている背の低い竹に似たそれを買ってこれで屋根を葺いたそうです。これは長持ちする。それから貧しい家は普通のチガヤ，マカヤというけどね，この辺に生えている普通のカヤで葺いたね。

－神山にあった主な建物について聞かせて下さい。

民家ではね，瓦葺きで「イリジヨウ」という家が裕福な農家で有名で，イチバンザ，ニバンザ，サンバンザというのがあったよ。台所，奥にも部屋があって，それと昔は子どもも孫も，みんな一緒に生活してるから，アシャギといってね，別の棟もあって，そこも瓦葺きだった。建物は全て廊下でつながれていて，しかもその廊下には瓦の屋根もついていた。雨の日でも各部屋に移動できるようになっていたね。それから，馬小屋，牛小屋も瓦葺きだった。

－戦前には大きな事件や事故はなかったんですか。

泥棒の話はよく聞いたさあ。食べ物がよく盗まれた。だから，大人から月のない晩は「名を名のれ」とよく言われたよ。「ターセミセーガヤー」と言って暗闇の中で挨拶しましたよ。「私はどこどこの誰々だよ，あなたは誰ですか？」って挨拶をしなさいって言われたよ。そして，返事をしない，知らん顔している人は怪しい人っ

て言ってね。家に帰って連絡したそうです。怪しい者が集落内に入りこんでいるというのが各家庭に伝わって，警戒したそうです。私が中学生の頃，戦後の話になるがドロボウが入ったの。非常用の鐘を打ってね。「3回だったら青年会」，「ドロボウだったら連打」。「鳴りやまないのは，火事だー，若いのは集まれ」ってね。その時，私の父親は男は非常の時は集まらんといかんよ，と言って，一緒に行った。非常の時は子どもでも集めさせられた。昔はみんなで守ろうという気持ちが強かったから。ドロボウの間でも宜野湾は恐いよっていう話もあったらしいがね。

災害で一番恐かったのは台風。今みたいに頑丈な家じゃないから，家の周りにでっかい防風林を植えてあった。農作物はみんなダメになるからね，食べ物にも困った。けど，サツマイモはほっといても腐らないから大丈夫だった。

でも，私達にとってはね，台風で嬉しいことがひとつあった。台風で木からみかんが落ちているから。台風の時に落ちたみかんは拾って食べたね。災害で恐いのは，干ばつも恐かった。私が経験したわけではないけど，大人から聞いた話によると，7ヶ月雨が降らなくてね。宜野湾には4ヶ所の共同の井戸があって，その中で豊富だったのがウブガー（産泉）。普天間基地の中にまだあるよ。出産の時とか，普通の飲み水にも使った。干ばつの時には，村中の人々が並んでくんで，なんとか水を探し求めて。鍾乳洞（今の飛行場地下）に水がたまっているのを発見したんですよ。発見したのが，ミーガーと言ったんだが（新川）。昔の人は水に対して感謝の気持ちが強いから，時々，線香をあげに行くよ。今でもウブガーには毎年旧6月25日に掃除に行ってるよ。

ニワトリを放し飼いにしているから，増えると畑のものを食べたりしたから，ニワトリを放し飼いにしていたら青年会がもらっていいという意味だよって言って，青年会がニワトリをつかんで，主に罰金したりしたって。雑草も，よその畑に広がるからよく見張りが来たよ。人を殺したとか，大きな事件は聞いたことがないね。警察も見たことはないねえ。今みたいに大きな警察署はわからんが，駐在所はあったよ。

2）字神山，字安仁屋の生活

字神山の生活

証言1　神山の暮らしぶり

① 話をしてくれた人　佐喜眞祐輝さん
② 話を聞いた人　さほ・あき・ゆい
③ 話を聞いた日　2003年7月14日

さ　ほ　戦前，神山には，どれだけの人が住んでいたんですか？

佐喜眞　神山には84世帯，167人の人が住んでいたんだ。神山の字は歴史が古かったんだ。

さ　ほ　神山の人は働きものだったと聞いたんですが，一方で，農業もうまくいったということも聞いています。これと関係してのお話を聞かせて下さい。

佐喜眞　それには，大きく2つの理由があって，ひとつは，神山の人は先祖代々の土地がたくさんあって，その広い土地を利用して，農業をやっていたからなんだ。また，ふたつめは，宜野湾市には，多くの共同井戸があって，その井戸から，ホースやパイプなどで水を田んぼまでひき，農業をしていたからだと思うよ。

さ　ほ　神山の家の屋根は，竹をさいて作ったと聞いたのですが，その竹はどこから持ってきたんですか？

佐喜眞　お金持ちの人は，瓦を使って，それ以外の人は，ヤンバルから持ってきた竹や野に落ちている葉をうまく使って屋根を作ったんだよ。

証言2　神山の暮らし

① 話をしてくれた人　宮城真吉さん　80歳
② 話を聞いた人　ゆい・さほ・あき
③ 話を聞いた日　2003年6月26日

神山の人々は，さとうきびを作ったり，家畜を飼ったりしていて，村には働き者が多かったので，お金持ちがたくさんいたよ。住んでいた家は，茅葺きで，屋根はヤンバルからとってきた竹をさいたもので出来ていたんだよ。

神山の人々が農業がうまくいっていた理由は主に３つあってね。ひとつめは，先祖代々の大きな土地を受け継いでいる人がたくさんいて，たくさんの土地を農業のために使うことができたからなんだ。ふたつめは，神山には，たくさんの共同井戸があったから，その井戸から水を田畑にひいて，みんなで使っていたからなんだよ。そして，最後のひとつは，神山はもともと防風林で緑豊かだったからなんだ。また，田畑で作った作物は，売りに行ったり，余った物を家で食べたりしていたよ。

証言３　神山の生活について語る

① 話をしてくれた人　平敷兼哉さん　34歳
② 話を聞いた人　たかふみ・あきひと・すぐる・ひとし
③ 話を聞いた日　2003年６月25日

神山の人々は，ほとんど農業でさとうきびとサツマイモを作っていたんだ。さとうきびは，サーターヤーで砂糖に変えて，軽便鉄道で那覇や宜野湾村のマチグァーで売っていたんだよ。闘牛場や井戸があったらしくて，サーターヤーが３カ所くらいあったね。ちなみに，「サーターヤー」とは，さとうきびをしぼって，砂糖にする小屋（製糖屋）のことだよ。

神山の人は，84世帯，人口は447人くらい住んでいたよ。小学校は無く，近くの字宜野湾の小学校に通っていたんだ。並松の松の木の葉を取って火を起こしていたんだよ。特に，台風の後にいっぱい落ちたんだよ。松の葉は，馬のエサをあたためる時や，ご飯やサツマイモを蒸す時に使ったよ。神山の住民は今の第二小学校の近くに住んでいるそうだよ。

神山にも，「シルークルー事件」があったんだよ。その時は，住民も巻き込まれて大変だったらしい。その当時の村長さんが山城吾郎さんという人で，今はもういないよ。

証言４　戦前の殺人事件

① 話をしてくれた人　普天間朝英さん　83歳
② 話を聞いた人　みちる・ひなこ・あきこ
③ 話を聞いた日　2003年９月25日

私は直接経験してないけど，従兄弟が経験したんだけどね。飛行場の真ん中あたりに，神山という集落があってね，そこの入口の所に闘牛場があって，そこで石の粉をとっていた。その石は何をするかというと，その頃はアスファルトというものがないから小学校の中庭にしいて重い物で固めて，ドロンコにならないようにしていたわけ。８年生（今の中２）が石粉を宜野湾小学校まで担いで。その石粉がね，神山の入口あたりにたくさんとれる所があるわけ。ところがその石粉は山みたいになっていて，その下から取っていったわけ。そしたら，上からくずれるでしょ。大正14年，その時の高等２年生が石粉をとっていた時にパーっと崩れてきたわけ。喜友名の人が１人亡くなった。それから何十名という人が石粉を担いでいるから担いだまま石に押しつぶされてね。助かったけど，ケガしたさあ。私の従兄弟も片足なくなっていたよ。

今から話すことが事件になるかどうかわからないけど，師範学校を卒業して，どこの学校に勤めるかまだ決まっていない時に，お姉さんを殺してしまった話がある。そのお姉さんは，公にしてはいけないのかもしれないが，精神異常者でね，よくお母さんをいじめたものだから，このやろうと言って，その弟が上から覆い被さったら，息ができなくなって姉は窒息死してしまったわけ。その後，学校が立ち上がって弟をかばおうとしたわけね。わざとじゃないから，救おうといって。でも，救うためには弁護士が必要でしょ？弁護士はお金が高いから，誰もお金を出せない。その時に，ある弁護士が無料で弁護してあげましょうといって，色々と手続きをして，本当なら20～30年監獄に入るんですが，執行猶予ですんだわけ。本人は，「姉さんを殺してしまったんだから，どんな罰を受けてもいい。」と言った。その後，海軍になって，サイパン沖で船がしずんで亡くなったけどね。

今でも政治家は２つに分かれているでしょう？昔も，政友会と民政民党と２つあったんだけど，この争いはすごかった。非常に有名でしたよ。シルークルー闘争と呼んでいましたね。私が小学校１年生の時に，綺麗な羽織袴を着た人が教

室の窓から入ってきて，机をバタバタと倒して出ていきよったわけ。先生に聞いたら，あの人は議員さんで，敵に追われて，捕まえられたら殴られるから，逃げているんだよと言いよった。後できくと，その人はほら穴で飲まず食わずでこもっていたって。闘争の時には，大人が棒とかクワとか持って，ある人はカマの灰を持って。なんでかっていったら目つぶしって（笑）。家で選挙の話なんてできなかったもの。子どもたちもひどい時には白と黒で分かれていたよ。

またね，大正の始めごろの話ですが，追い剥ぎというのがあったんですよ。追い剥ぎで一番有名だった場所は，西原入口。昔，あそこには家が全くなくてね。イモを売って帰る途中の人が狙われたわけよ。

あと，嘉数という集落の話だけど，朝，学校で柔道あるいは剣道の練習があったわけ。その学校は，今の首里高のことだよ。県立一中と呼んでいましたが。そこに朝稽古に行っていたわけ。ちょうど月の始めだったから，授業料の3円40銭ぐらいを持って。当時，大人が1日中働いて20銭くらいしかもらえなかったから，すごい金額ですよ。お米1升40銭だったかな。その授業料目当てに寄って来たんだな。「おい！お前授業料もってるだろう。」と言って，その人が正直に「はい。」と言ったら「出しなさい。」といって包丁を出してきた。でもこの人は柔道をやっていたので，犯人を一本背負いしたわけだな。落ちる時，ドーンと落ちて，動かなくなったって。この学生は人を殺したと思って，その日，学校へ行かないで家に閉じこもってブルブル震えて。その後，集落の人が学校に行ってみると，犯人はもう逃げて，いなかったらしいけど，この学生は恐怖心から学校を辞めて，家から出てこなくなったそうですよ。戦後は嫁も子どももいて明るかったけど，戦前は仕事もせずに黙って一点をずーと見ていたって。こういうのも，大きな事件ですよね。

昔はね，徴兵検査というのがあって，20才になるとみんな検査だった。当時兵隊になったら，戦争に連れて行かれて，生きては帰れないと思っていたわけ。それで，徴兵検査から逃れるために，いろんなことをしました。例えば，私の叔父は寝ている時に母親が右目を針で刺しよったって。なんで右目かといったら，右目で銃をのぞくでしょう。だから，それで銃を持てないといって，逃れたわけ。その前の叔父は指。さとうきびを刈るカマで切ったそうです。指一本はなくなってもいいけど，体がなくなったらおしまいだということで。また，醤油をたくさん飲ませることもあったよ。徴兵検査を落ちるためにやったらしいです。それが罪になって，監獄に行った人もたくさんいますよ。

あきこ　盗みとかで刑務所に入ったんですか。

普天間　盗みは，半年でしたかね。

あきこ　死刑はあったんですか。

普天間　死刑の話は聞いたことがないなあ。家にも一度，ドロボウが入りましたよ。夜中にこっそり入ってきて，私の父が「ドロボウが入ってるよお。」と言ったらすぐ逃げよった。荷物はどこからか盗んできた物でしょうねえ。庭の木の下においてから逃げていきよったよ。それをまた交番にもっていったんだけどね（笑）。

ひなこ　警察署はどこにあったんですか。

普天間　首里に大きな警察署があって，他は交番所でしたね。そんなに事件もなかったので。

みちる　裁判所はあったんですか。

普天間　那覇にひとつだけ。当時は，警察といったら，みんな怖がるよ。私の従兄弟も叔父も巡査だったから，巡査が家に来るでしょう？すると「何かあったの？」と聞かれたよ。制服だし，泣く子もだまったよ。

ひなこ　どんな犯罪がありましたか。

普天間　戦前もデパートみたいなものが那覇にあったんだけど，そこでちょっとスリをして，巡査にひっぱられたりはしよった。大体は生活に困っている人達がやった。悪質なものはほとんどなかったね。

ひなこ　自然災害にはどんなものがあったんで

すか。

普天間　一番は台風。台風では，家の材料が茅葺きだから，簡単に壊れるんですよ。

あきこ　じゃあ，また作り直すんですか。

普天間　みんなで協力して作り直したよ。隣組というグループがあってね，その人達で作り直したよ。

みちる　作り直すのにどれくらいの時間がかかったんですか。

普天間　意外と簡単でしたよ。非常に簡単な作りだから，また壊れたけど。あと，干ばつも農家にとっては大変だったな。井戸はここ（南上原）から喜友名までくみに行ったから。子どもの手伝いとして，水を担いで来るっていうのもあったよ。雨が降らないから大変だったよ。あと火事もあった。一度燃えたらパッともえて，水をくんでも，もう遅かった。

字安仁屋の生活

証言1　安仁屋の風習・生活

① 話をしてくれた人　宮城豊吉さん　82歳

② 話を聞いた人　いつき・ひなこ

③ 話を聞いた日　2003年8月19日

いつき　安仁屋は貧しい村だったんですか？

宮　城　不便な所ではあったけど，貧しくはなく，むしろ裕福だったよ。田んぼが多くて，沖縄一水田が多かった。

ひなこ　移民する人は多かったのですか？

宮　城　移民していく人はあまりいなかったよ。

いつき　移民する時の交通手段はどんな手段がありましたか？

宮　城　ほぼ歩きだったね。ケービンで那覇まで行って，那覇から出発するとしても大山駅までは4㎞くらいは歩きだったよ。でも，だいたいはケービンよりも客馬車の方に乗っていた。だって客馬車はケービンよりも安かったからね。普天間から那覇まで，ケービンは25銭で，客馬車10銭だったよ。丸一日働いて50銭もらっていた時代だよ。

ひなこ　どんな食事をとっていたのですか？

宮　城　おかゆに野菜が入ったものを，おわん一杯食べるのがやっとだったよ。いつもイモとボロボロジューシーなんかだけだったので，1日に4回食事をしないと体がもたなかった。朝食はミークフハヤーといっていた。次は11時頃にシティミティム。今のように12時には食べずに，このシティミティムの次はアシバンといって3時に食べたよ。それから7～8時頃に夕食を食べる。お祝いの日は腹一杯食べることができたので，とても嬉しかったよ。

旧の2月2日は男だけで豊作を祈願したよ。旧の3月3日は女だけのお祝い。これはサングクチャーといっていた。今は3月3日にひな祭りをするけど，昔は旧の5月にしていたんだよ。

ひなこ　普段はどのようなものを着ていたのですか？

宮　城　いつも着物をつけていたよ。役場や郵便局の人達はお金持ちだったので洋服を着ていたけどね。

いつき　お祝いのことにもどるのですが，どのようなご馳走を作っていたのですか？

宮　城　今と同じような，お重箱みたいなのや，お祝いの時だけお汁に肉を入れたよ。子ども達は大喜びでした。

ひなこ　お風呂はどうしていたのですか？

宮　城　お鍋に湯を湧かして浴びていたよ。水浴びは毎日していたけどね。宜野湾には銭湯が1つだけあって，月曜日にお客さんが多かった。垢で黒い水になってもお風呂に入る人もいました。

いつき　そのころのエライ人ってどんな人だったのですか？

宮　城　村長・校長・役人・議員などだよ。

ひなこ　本に書いてあったのですが，ハジチとはなんですか？

宮　城　昔の刺青のこと。明治の始めから大正の始めに女の人だけがしていたよ。でも，大正からはやる人が少なくなった

よ。ところで，昭和17年，18年頃に，電話が役場と郵便局にできました。急ぎの用があまりなかったので，使う人はあまりいませんでしたね。海が近くにあったんですよ。ですが人々はただ単に魚をとって食べることを嫌い，田畑で働かない人をウフゲーナと呼んでいたさあ。腕を遊ばすという意味だよ。宜野湾は，浦添市や北谷，中城から土地を分けてできたんですよ。ちなみに安仁屋の土地は北谷からです。子どもは戦前は普天間小に，戦後は大山小へ行ったんですよ。

証言2　安仁屋の集落

① 話をしてくれた人　普天間朝英さん　83歳
② 話を聞いた人　いつき・あいり・ひなこ
③ 話を聞いた日　2003年6月26日

私は安仁屋に住んでいなかったけれど，少しは知っていますよ。警察署はなかったけれど，交番というか駐在所みたいなものはあったんですよ。今の普天間基地の辺りかなあ。事件はなかったから，月に1回，1人か2人くらい来て，みんなの家の周りを掃除検査に来ていたんです。

砂糖がたくさん作られていて，砂糖はお金の代わりのようなもので，たくさん作った人がお金持ちといわれていたんですよ。鍛冶屋では，へら，かま，くわなどの農具がつくられていたさあ。農業では，お米，さとうきび，イモ，大豆が栽培されていたんですよ。水は井戸からひいていたんだよ。何度も同じ所にイモを植えて，夏に多く植えて，冬，収穫して，冬は作物があまり育たないから，冬に食べるものは夏に植えていたんだ。保存しないで，食べる分だけとっていたんです。

役所は今の普天間飛行場の真ん中辺りにあったんだよ。税はあったのですが，一部の人に高くしたり安くしたりして不公平だったんです。選挙があって，いろんなのがあったんですけど，権利は男の人にしかなかったんですよ。

証言3　安仁屋の集落

① 話をしてくれた人　大城樹さん　25歳
② 話を聞いた人　いつき・あいり・ひなこ
③ 話を聞いた日　2003年6月25日

私は安仁屋という集落についてよく知らないけど，本に書いてあることは説明できますよ。安仁屋に住んでいた子ども達のことですけど，学校は無くて，畑で大人が作物を収穫する時だけ，預けられていたため，子どもが集まっていました。でも，大きくなった子どもは大人と一緒に収穫の手伝いをしていました。当時は自給自足だったので大きくなった子は毎日農業の手伝いをしていましたね。

自給自足なので毎日の食事は「イモ」だったそうなんですけど，田イモは栽培されていなかったそうですよ。安仁屋の伝統的な料理は「ムーチー」と「ジューシー」でしたけど，お祭りや行事の時くらいしか食べられないご馳走だったそうです。シビランカという札は家の屋根につるしていました。仏壇を毎日拝む所にありましたよ。

3）宜野湾並松・市場・軽便鉄道・事件

証言1　並松街道の周りの市場・乗り物・行事

① 話をしてくれた人　玉那覇清仁さん　73歳
② 話を聞いた人　まい・みお・あい・きりこ
③ 話を聞いた日　2003年6月30日

並松通り沿いにある市場はねえ，それほど大きくもなく，「露天市場」と言われていましたねえ。その市場では，肉に豆，子豚，魚や米，イモ，豆腐，誰でも自由に売り買いができる所だったさあ。子豚も一日一頭売れればみんな喜んださあ。肉は，首里や嘉手納の金持ちが買っていたさあ。並松街道は遊び場で，きれいだった。記念撮影でも使われていたねえ。国宝で子ども4～5人で囲めるぐらいの松の太さだったさあ。並松街道では乗り物も通っていた。乗り合い自動車という，今のバスみたいなものがあったよ。1日1往復（午前・午後）していた。馬車は荷物を乗せるためなので，人が乗っていたら警察につかまってしまうさあ。タクシーはお金持ちしか乗れなかったよ。

それから，“ウマハラシー”という行事があった。年に３回だった。国民学校の近くでやっていたねえ。競争ではなくお金持ちがする娯楽だった。競うのは，馬の形は良いか，歩き方は良いか，飾りは良いかで，「私はこんなにいい馬を飼っているんですよ。」という感じに自慢をしあい，馬にご馳走を食べさせたりして，賑わったさあ。

証言２　当時の事故や事件について

① 話をしてくれた人　平敷兼哉さん　34歳
② 話を聞いた人　みちる・あやか・ひろか・ことね・あかり
③ 話を聞いた日　2003年６月25日

戦前の事件といえば，やっぱり「シルークルー」だね。シルークルーというのは，方言で白黒。意見が対立している，という意味さあ。明治45年の５月，衆議院議員選挙で当時の村長が，区長たちに投票する人を無理矢理指名しようとした。けど，結局区長たちはそれを無視して別の人に投票したんだ。それと，次の村会議員選挙でも村長は同じようなことをして，「選挙干渉事件」として新聞に大きく載ったんだ。このことから，シルー派とクルー派に分かれて争いが始まったんだよ。段々争いが激しくなって，行事も集落の中で分かれて行われたり，派が別だと結婚もできなかったんだよ。これは約３年近く続いて，昭和の初め頃まで続いたんだよ。

証言３　並松街道の様子を語る

① 話をしてくれた人　中原昭夫さん　30歳
　　比嘉涼子さん　27歳
② 話を聞いた人　まい・みお・あい・きりこ
③ 話を聞いた日　2003年６月25日

今から62年前の宜野湾街道（並松木）の陰は涼しく，とても賑やかだったそうですよ。この松が植えられたのは1671年頃，尚貞王の後を継ぐ予定であった尚純の指示により植えられたそうです。元日やお参りの時には首里の王様と家来が大勢で通っていたらしいです。

他にも，綱引きをしたり年に３回ウマハラシー（馬場）をやっていたそうですよ。平日は学生や桃売りのおばさん達が利用していた客馬車が歩いていたそうです。

普天間から嘉手納まで６キロの道のりで長かったそうです。松は3,000本ぐらいで，木の高さは10㍍もあったそうです。子どもたちは，松の木を使ってかくれんぼをしたりして遊んでいたそうです。また，きれいな松並木であったため記念撮影にもよく使われていたそうです。

隣の広場では雑貨屋などの店が並んでいて楽しかったそうです。市場には，地元の主婦達が早起きして作ったものが並んでいて，活気あふれていたそうです。並松の横には小さな線路があって冬には収穫したさとうきびなどを運んでくれるトロッコというのが走っていたそうです。

証言４　昔の並松街道とその周り

① 話をしてくれた人　普天間朝英さん　83歳
② 話を聞いた人　ゆうき
③ 話を聞いた日　2003年６月26日

みんな，並松街道のことを「松並街道」とか「ナンマチ」と呼んでいたさあ。あれは，普天間から嘉数まで続いていたねえ。ナンマチの長さは５㎞程だったさあ。ナンマチは，蔡温という人が緑豊かな沖縄にしようと植えたんだよ。松の種類はリュウキュウマツでね，材木にも使えるよ。松の数は3,000～3,300本ぐらいだった。あと，ナンマチはね，500年ほど前に植えられたんだ。植えるのは大規模できつかったし，「動員」といってね，周囲の住民が植えるのに手伝わされたよ。あと，松の根が畑の中まで伸びていって，畑の豆かなんかを枯れさせてしまったり，畑の主が，松の根に傷をつけて枯れさせた事件がある。枯れた松の木は臼に使われたよ。

あと，「馬場」というのがね，ナンマチの隣にあった。馬場はね，馬を走らせる馬の運動会みたいなものだった。これに参加できるのはね，お金持ちだけ。なぜならね，自分の馬を持っていないとレースに参加できないからね。出る馬は，10頭～20頭だった。走る距離は，150mを何回も往復させるんだよ。馬場はねえ，お金持ちのレクレーションみたいなものさ。

証言5　昔の並松通りを語る

① 話をしてくれた人　新城信敏さん　75歳
② 話を聞いた人　あやか・みお・ことね
③ 話を聞いた日　2003年9月18日

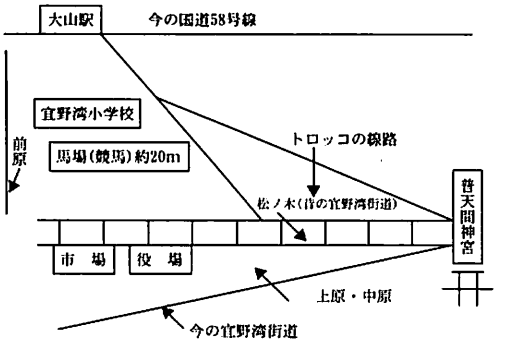
市場は宜野湾村の役場の近くにあった。宜野湾マチグァーって言っていたよ。市場には20歳前後の女の人が野菜をカゴに入れ頭にのせて売りに行ったり，男の人は力があったからかついで売りに行ってたさ。その市場には建物らしいものはなくて，農産物のフリーマーケットで自分の畑で取れた葉野菜や芋を持ってきて売っていた。でも季節によっては珍しいものもあったねぇ。私のお袋も行きよった。

当時の人はみんな農業をしていたから，あまり買いにはこなかったけど首里の侍が買いに来てたよ。売る所は決まってなく，好きな所で売ることができたんだ。市場はだいたい午前中が賑やかだった。朝市だったから家を出るのが6時ぐらいで，7時頃から買いに来る人がいた。昔は酒・たばこ・米は許可がないと売ってはいけないことになっていたんだよ。勝手に売ると捕まったよ。でも野菜だけはどこで売ってもよかったんだよ。

芋には種類があって，マージ（赤土）とジャーガル（ねずみ色）で，新城とか普天間あたりの土はマージで作った芋は，育つのは遅いけどおいしかった。志真志や北上原，西原あたりの土のジャーガルはたくさんとれるし育つのも早いけど水っぽくておいしくなかった。だから値段にも差があった。

市場には子どもの玩具はなく，当時は自分達で作って遊んでいた。でも旧の5月4日だけは親が子どものために駒や羽根つきを買ってくれたね。子どもはそれが一番の楽しみだった。今の普天間高校のあたりに，昔，郡長が住んでいたよ。並松街道の間をトロッコという小さな汽車が走っていて，そのトロッコはさとうきび専用だったから，積まれているさとうきびを学校帰りにとって食べたりしてた。並松は今の石川市まで続いていたんだよ。

さて，不思議なことは，今でもあの何千本もあった松並木が戦後どこにいったのか誰もわからないんだよ。



新城信敏さんの話を聞いたあやかさんとみおさんは，当時の状況を上図のように描いた。この図によると，普天間神宮から並松が南にのび，並松街道の側には市場や役場，また近くには馬場があったことがわかる。さとうきびなどを運んでいたトロッコの線路は普天間神宮と大山駅を結びつけていたようだ。

新城 信敏さんの話を聞く

かつての並松街道を歩く（右は嘉数中学校）
2003年9月25日

証言6　昔の宜野湾村を語る

① 話をしてくれた人　米須清行さん　81歳
　　トミさん　76歳
② 話を聞いた人　　あい・きりこ
③ 話を聞いた日　　2003年8月25日

昔の宜野湾村には小さな商店が4軒あって，郵便局が1つ，役場の周囲に散髪屋が2軒，駄菓子屋が1軒，酒屋（島袋酒屋）があったさ。並松は県道で（両方並松がある）荷馬車が通るくらい狭かったさ。私が通っていた宜野湾尋常高等小学校の校歌にも並松のことが書いてあるさ。

「れいこう高し　普天間宮
深きゆかりの　森の川
国宝並松　青々と
緑したる　清てんち（天気）
文化のうしを道びきて
ここにたちたる　我が母校」

私（清行さん）の時はまだ“宜野湾尋常高等小学校”だったけど，トミさんの時は“国民学校”と名前が変わったねえ。国民学校の跡は，飛行場に変わり，普天間高校辺りは中頭郡役所があったさ。普天間の神宮前と字宜野湾に風呂屋があったよ。馬場をする所が役場の隣←宜野湾の中心部（300㍍ぐらいの馬場ができる）にあったよ。それからトロッコは大山の製糖工場に運んでいたさ。

証言7　軽便鉄道について語る

① 話をしてくれた人　中里昭夫さん
　　（博物館職員）30歳
② 話を聞いた人　　しゆう・みお・いちろう
③ 話を聞いた日　　2003年6月25日

軽便鉄道は，人が乗る所と貨物車の所があり，貨物車には，さとうきびがあったらしい。宜野湾で一番小さい駅は，真志喜と大謝名で駅員はいなくて，小さな小屋みたいだった。お金はたぶん軽便の中で払っていたと思います。

大山駅は，一番大きくて，弁当とかも売っていて，駅員も一杯いたよ。売店で売られていた，ゴーヤーチャンプルーの味は，忘れられないさあ。軽便鉄道のねだんは，だいたい，五銭くらいだったよ。（1銭＝1円の1／100）軽便鉄道の事故とかは，あんまりなかったけど，軽便の火の粉で藁葺きの家が火事になったことは知ってるさ。軽便でも，那覇から大山までかなり時間がかかったさ。大山駅に来る電車は間があって，そういう所は不便だったんだ。軽便鉄道が通っていた線路はみんな重要だよ。最後に，駅の後が残っている所は，大山にあるよ。

証言8　戦前の軽便鉄道について語る

① 話をしてくれた人　普天間朝英さん　83歳
② 話を聞いた人　　しゆう・みお・いちろう
③ 話を聞いた日　　2003年6月26日

子どもたちの中には登校する時に軽便を使っていたよ。軽便鉄道の乗り心地は，最高だった。長いイスがあって，当時は軽便しかなかったから最高だった。軽便鉄道の音は，ガタンゴトンで，汽笛はピィーという音が鳴っていたよ。軽便鉄道には乗る人がたくさんいて，いつも混んでいた。

列車の中は，とても明るかった。終了は，大体，9～10時位かな。軽便鉄道には，今のバス券と似たような，割引券や，定期券があった。料金は，とてもお手頃で，よかったよ。5銭位だったね。今の大体70歳を越えている人は，ほとんど知っているよ。

証言9　軽便鉄道の特徴

① 話をしてくれた人　比嘉涼子さん
　　（博物館職員）27歳
② 話を聞いた人　　しゅういち
③ 話を聞いた日　　2003年6月25日

昔の軽便鉄道は，真喜志と大謝名と大山を，約15kmのスピードで走っていたわけ。上り坂は，遅すぎて，お客さんは降りて軽便を後から押したりもしたそうだ。値段は距離に応じて変わるけど，那覇から大山までは27銭で，真喜志駅までは24銭で，大謝名駅までは22銭だった。昔は銭だったよ。宜野湾の中では，大山駅が一番大きい駅だった。その大山駅の駅長さんは，古波蔵恵公さんていう人だった。

駅の職員とかは，紺色の帽子と制服を着てい

たね。だけど，軽便は全部戦争で壊されてなくなったさ。

証言10 軽便鉄道の昔の様子

① 話をしてくれた人　中里昭夫さん
（宜野湾市立博物館職員）30歳

② 話を聞いた人　しゅういち・たかひろ・たくみ・りんさく

③ 話を聞いた日　2003年6月25日

軽便鉄道は，時速15～20kmの速さで走っていたさ。上り坂では，客が降りて軽便鉄道を押していたさあ。値段は距離によって違っていたよ。小学生とかには割引券があって，乗ることができたんだよ。軽便鉄道の線路には，嘉手納線と糸満線と与那原線があったよ。運転手は2人いたと思う。乗る人はほとんどが学生だった。でも，戦争が始まったら民間人は乗せなかった。

そういえば，嘉手納駅から那覇駅へさとうきびをもっていったこともあった。車庫は，那覇の方にあったな。沖縄本島だけでも，13駅はあった。

那覇から大山まで27銭で，昔は銭を使っていた。真志喜駅までは，24銭で少し安かった。那覇から大謝名までは，22銭でさらに安かったよ。宜野湾では大山駅が一番大きい駅だった。大山駅の駅長さんの名前は，古波蔵さんだった。駅の職員とかは，昔から紺色の帽子と制服が決まっていたよ。今では，あの懐かしい軽便鉄道の汽笛の音さえも聞けないね。だけど，これからは，新しいモノレールが走るからいいね。

証言11 軽便の特徴，様子等について

① 話をしてくれた人　宮城豊吉さん　83歳

② 話を聞いた人　ゆいと・のりひろ・けんいち・のぶたか

③ 話を聞いた日　2003年6月19日

ケービン（軽便のこと）には乗ったことがあってね，中の様子は今のバスが連なっている感じでね，上等席とかの区別はなかった。大体の軽便は石炭で走るんだけど，ガソリンで走るのもあった。石炭で走るのは人とサトウキビを別々の所に乗せていて，ガソリンの方は人だけを乗せていたさ。石炭の方もガソリンで走るのも速さは同じぐらいだったかな。石炭の方は坂を登れなくて，砂を敷いて登っていたさ。だけどガソリンの方は楽々に登れたよ。線路は幅1m20cm位で那覇等，大きい駅は2本の線路，無人駅には1本の線路しかなかった。ちなみに石炭の方は3両，ガソリンの方は全て1両で，1両に30人位乗れたよ。

走る時はガタンガタンと音が鳴って，汽笛はピューッと高い音がしたさ。駅は那覇が中心で，那覇は働く人も多かった。大きな駅は，確か，那覇，大山，嘉手納駅の3つで（那覇・嘉手納線），そこ以外は無人だった。那覇，嘉手納，糸満，与那原，安里駅には店があったけど，これといって特別なものはなかったよ。切符は，大きい駅は駅で買えたけど無人駅では軽便の中で車掌さんから，切符を買っていた。学生さんなんかは，学校に行くために軽便鉄道によく乗るから切符をまとめ買いして，割引して買っていた。1回24銭で乗れたよ。那覇駅で，エンジンの交換や掃除をしていたね。ちなみに，明治頃に造られて，1922年（大正11年）ごろに開通してから戦争までは働いていたのに，戦争で全て壊されたさ。

宮城 豊吉さんの話を聞く

証言12 恵昭さんの記憶

① 話をしてくれた人　古波蔵恵昭さん　72歳

② 話を聞いた人　のぶたか

③ 話を聞いた日　2003年9月18日

与那原線は，1911年に出来たんだよ。嘉手納線は1922年に，糸満線は，翌年の1923年に出来

たよ。軽便鉄道の速度は，15～20km位だったかね。あんたたちでも追いつけるはずよ。それからレールの幅も小さかったね。嘉手納には大きな製糖工場があって，大山駅から一杯さとうきびを運んだよ。

軽便鉄道は蒸気機関車というものだった。水を水蒸気にさせてその力で進んでいたんだよ。水は大山駅で給水していた。軽便鉄道は，事故を起こしたこともあった。確か，北谷と桑江駅の間でね，ガソリンカーが転覆したこともあったよ。他にも火の粉が弾薬について爆発を起こしたこともあった。

最後に自慢じゃないけど，凄いことを言おうね。昭和天皇が皇太子の時，沖縄視察に来て軽便に乗ったわけ。その時の車掌は，僕の父親だったわけさ。

古波蔵 恵昭さんの話を聞く

証言13　頻繁にあった事故について語る

① 話をしてくれた人　普天間朝英さん　83歳
② 話を聞いた人　みちる・あやか・ことね
③ 話を聞いた日　2003年７月14日

戦前は今に比べると平和で，事件や事故というのは，あまりなかったね。でも，頻繁にあったのは，さとうきびをしぼる歯車に手を誤って入れて，手や指をなくしてしまうという事故だった。

泥棒や強盗とかはなかったけど，こそ泥はあった。勝手に人の家に入って物を盗ったり，物色したりしてた。あと，ハーエー（追いはぎ）もあってね，昔の金持ちは着物も上等なモン（物）ばっかり着てたから，その着物を狙って，剥ぎ取ったり，剥ぎ取った物を売ったりしていたさ。

雨戸も閉めないで寝る程，平和だった。周りが知り合いだから助けてくれたりもしたから，大きな事件は，あまり起きなかったんだよ。

証言14　真志喜の周辺について語る

① 話をしてくれた人　宮城宏子さん　63歳
② 話を聞いた人　しゆう
③ 話を聞いた日　2003年７月30日

真志喜の周りには，丘があって，下の方に行くと，田んぼ，山の方に上がっていくと，宜野湾小学校があった。私の家には，さとうきび畑があり，家の前には池があった。丘からは海が見えた。丘の反対側に，店があった。その店によく石油を買いに行った。店の下の方には川があった。他には，日本軍が牛や馬に乗って見せびらかしていた。昔は，自然が一杯あった。

しゆう君は，神奈川県に住む祖母から話を聞き，まとめた。祖母の宮城さんは，長年宜野湾市に住んでいたが，数年前に神奈川県横浜市に移住している。

6．記録３　金城功さんと軽便鉄道について語り合う

軽便鉄道についての意見交流の場を金城功さん（沖縄大学非常勤講師）に聴いて頂き，また子どもの質問タイムも設けた。授業の冒頭，昭和天皇の皇太子時代，与那原から那覇まで軽便列車で乗車したことがあったこと（「お召し列車」と呼ばれた），列車の速度が遅いためタダ乗りもあったという話，列車の転覆事故や火の粉による火事があったことなどが報告された。以下は，その続きである。

たくみ　みちるさんの「民家に火の粉が飛んでいった。」っていうのはどういうことですか？

みちる　博物館で聞いた話なんですけど，伊佐の辺りで軽便鉄道の石炭等から火の粉が民家に飛んで，それで家が全焼して

しまったことがあったそうです。

のぶたか　その民家に火がついたっていうのですけど，その家の人たちは，どうなったんですか？

みちる　それは，聞いてません。

しゅういち　火の粉が飛んだって言っているけど，どこから飛んだの？

みちる　だから，石炭を燃やしてるさ。

あやか　軽便の燃料タンクみたいなところがあるさ。

たかふみ　煙が出てくるところだろ？

あやか　うん。煙が出てくるところのタンクがあるさ。あの中で石炭燃やして，その石炭燃やしてるところから火の粉が飛んだんだ。

ひとし　軽便の駅には，電話をするところがあったって書いてあるけど，どういうときに電話を使っていたんですか？

たかひろ　それは駅長とかが，今から来る電車が何分遅れるとか，何分早まったとか，そういうのを電話で知らせるために使ったそうです。当時の軽便鉄道は，レールが１本で，事故になると大変だから，そうやって電話でやりとりして事故を防いでいた。

すぐる　その電話は一般の人とかは使えないの？

たかひろ　駅長の仕事で使っていたので，使えないと思います。

あやか　他に質問はありませんか？

けんいち　あいりさんに質問なんですけど，軽便の速度は今のバスとほとんど同じって言ってたんですけど，それは，ガソリンカーのことですか？

あいり　そうです，ガソリンカーのことです。

みちる　じゃあ，ガソリンカーの方は，今のバスと同じ位の速度で走っていたって言うことで。

けんいち　もっと，速いよな。

あやか　ガソリンカーは時速何キロで走っていたんですか？軽便のガソリンカーは大体何キロぐらい？

けんいち　時速40～60キロメートル位あったんじゃないか。

あやか　40キロ位だったら，今のバスと大体同じ位じゃない。

みちる　ゆいさん。駅長になるためには，たくさんの試験を受けないとなれなかったっていうカードの説明をお願いします。

ゆ　い　古波蔵さんから聞いたんですけど，駅長になるには，まず，駅員から試験を受けて車掌になって，それから助役になって，最後に駅長になるための試験を受けて上がっていったそうです。

みちる　まさきさんは，「沖縄の線路は，ほとんど単線」っていうカードを書いていますが，説明して下さい。

まさき　古波蔵さんから聞いたんですけど，沖縄の線路はほとんど１本の線で出来ていたそうです。

みちる　沖縄の線路は，ほとんど１本の線路で出来ていた，ということですね。次のカードですけど，駅弁は，ゴーヤーチャンプルーと書いていますね。あきひと君，説明お願いします。

あきひと　駅の駅弁が，ゴーヤーチャンプルーであったってことと，各駅に駅で値段は20銭位の弁当みたいなものが売られていたらしい。

みちる　駅弁の中身は，ほとんどがゴーヤーチャンプルーで，20銭位という説明ですけど，質問はないですか？

たいち　駅弁を売っている店は，何軒くらいあったんですか？

あきひと　無人駅には売店はなくて，大きな駅には店があったようです。

けんいち　たいち君の質問に答えますけど，古波蔵さんの話によると，全部で７軒の店があったそうです。

みちる　全部で７軒だそうです。

担　任　何が７軒なの？

みちる　駅弁を売っている所。

担　任　それは沖縄県，島全体で？

のぶたか　それについて，説明します。那覇から嘉手納までの間の駅で，お弁当を売っ

ていた駅は７軒で，那覇と古波蔵駅と安里駅と城間駅と大山駅と桑江駅と嘉手納駅のことです。

担　任　那覇－嘉手納線の中で，７軒のお店があったってことだね。

みちる　じゃあ，次のひなこさんのカードを説明して下さい。

ひなこ　大きな駅には駅長がいて，小さな駅には駅長とか臨時の人とかいなかったということです。

みちる　小さな駅には，人がいなかった？

けんいち　ちっさい駅には誰もいない？

みちる　今の話をまとめると大きな駅以外は誰もいなくて，無人駅だということです。それでは，次のあやかさんの「軽便鉄道の開通」を説明して下さい。

あやか　那覇から与那原線が一番最初で，次，那覇から嘉手納線。最後に那覇から糸満線が開通しました。

さ　ほ　じゃあ，最初に開通したのは何年？

たくみ　えっと，大正３年，1914年の12月に那覇から与那原線が出て，その次は大正11年の1922年３月に嘉手納線が出て，翌年1923年の７月に糸満線が出た。

さ　ほ　大正で言ってくれる？

たくみ　大正３年の12月に那覇から与那原線で，那覇から嘉手納線が大正11年の３月で，大正12年の７月に糸満線が開通した。

担　任　今のことと関連して質問ないですか？

のぶたか　軽便鉄道を調べている人達に質問なんですけど，この全部作った総費用はどれくらいかかったんですか？

みちる　かかった費用。知らないですか？

担　任　じゃあ，これはまたあとで，ゲストの金城先生が知っているかもしれませんので，あとで，聞いてみましょう。

あ　き　質問ですけど，この３つの路線は，那覇を起点にして通っているんですか。

のぶたか　はい。那覇を起点として走っていました。

みちる　じゃあ，始点は必ず那覇で，そこから３つに分かれていったってこと？

担　任　古波蔵に必ず行くの？

のぶたか　うん，行く。

きりこ　まず，古波蔵に行って，嘉手納線は与儀に行って，糸満線と与那原線は真玉橋にいったようです。

担　任　先生の方からみんなに質問なんですが，なぜ，線路を与那原とか，糸満とか，嘉手納に延ばしたんでしょうか。

ひなこ　那覇は，中心地だから栄えてて，那覇に食べ物とかを売りに来たりするからだと思う。

担　任　那覇は分かる。なぜ嘉手納，なぜ与那原，なぜ糸満なんですかっていう質問なんですが。

ひかり　私は，嘉手納とか与那原は昔，人が多かったり，いっぱい作物を作ってたりして，那覇に運ぶときに，そこから鉄道が走ってたんでは，と思う。

いちろう　嘉手納と糸満と与那原には，サトウキビを作っていて，何かそれを那覇に運ぶためだと思う。

ゆうき　えっ，サトウキビって嘉手納で？

きりこ　多分，嘉手納には製糖工場があったんだと思う。

のぶたか　嘉手納には，大きな製糖工場があって，あと農林学校があったところです。あと，与那原は多分だけど，今は埋め立てしてるんだけど，海に近かったから，漁村とかあって魚とかを仕入れていたと思います。

担　任　糸満はどうなの？

のぶたか　糸満は南側さ。与那原は東側かな？嘉手納は，北側さ。だから，中南部どこにでも行けるようにやったと思います。

みちる　じゃあ，次のカードについて。ゆいさんの戦争が近づいてガソリンがなくなってきたから石炭で走るのが多かった。この説明をお願いします。

ゆ　い　最初はガソリンで走っていたことが多かったんだけど，ガソリンが少なくなっていったから，石炭で走るのが多くなっ

た，ということです。

のぶたか　あの，石炭もダメだったっていうときがあったので，木炭で走るときもあったそうです。

みちる　じゃあ，戦争が近づくと，ガソリンは使わなくなって，石炭か木炭を使うようになった。これに質問ないですか？じゃあ，次行きますよ。では，女性の駅員はいなかった，ゆかさん，説明お願いします。

ゆ　か　古波蔵さんが言ってたんですけど，駅には男の人しか働いていなかったそうです。

みちる　じゃあ，女性の駅員さんは１人もいなかった？じゃあ，男しかなれなったかもしれないね。

あやか　軽便鉄道を調べている人に質問なんですけど，女性の駅員はいなくても，売店とかで働いているおばさんとかはいたんですか？

けんいち　そりゃ，いるんじゃない。

あやか　さらに質問してもいいですか？何で，女性は駅で働くことができなかったんですか？

のぶたか　多分，戦争の時代は，今みたいに男と女の人が地位とか一緒じゃなくて，男の人が上の位で女の人は下の位だったから，軽便の駅員とか上の位の男の人しかなれなかったって言うことかな。

みちる　何か，戦争が近づいてくると兵士にするために子どもをたくさん生めみたいのがあって，お母さんみたいな感じの人たちは，子育てとか家事に徹していたと思います。

担　任　それでは，ゲストの金城先生に疑問点やみんなで議論したことについてまとめて話をして頂きましょう。

金　城　先に紹介されましたけど，金城功といいます。みなさんのお話を聞いて，それで，感づいたことを言いますとね，まず，制服の話ですけどね。制服はありました。あったんだけど，僕は鉄道

金城 功さんの話を聞く

を調べるときに，もちろんあるものだという先入観がありましてね。どういう制服であったのかっていうのを具体的に関係者に聞いておりませんので，細かいことはわかりません。詰襟というのかな。昔の学生たちが着けていたような制服。場合によっては，昔の警官が着けていたような制服の感じだそうです。

それから，駅弁なんですけどね。私は，今日，話を聞いてびっくりしました。沖縄には駅弁はないと思っていました。多分，古波蔵さんという方から聞いたお話のようですので，恐らくあったのかなと思います。４年くらい前，九州のテレビ会社から，「日本の国内の駅弁」というタイトルでね，日本にはどういう駅弁があるかという取材で沖縄に来ていました。それで，私も一緒に回ったんですけど，関係者の話を聞いても沖縄では駅弁はなかったって言う話でした。ですから，今度もう少し調べて，本当にあったのか，あるいは，駅弁というようなものがね，今売店でパンを売ってるような感じでね，何か売っていたのか。この点は，改めて調べなければいけないなあと感じました。

それから，なぜ，軽便鉄道の開通は那覇と与那原だったのか，随分考えたことがあります。これはね，人々が生

活に使う色んな品物がですね，那覇と与那原の間にかなり流通，運搬されているんですね。例えば，ちょっと前まで，石油コンロといってね，石油で色々炊飯など炊いていました。それから戦前は何を使っていたかというと，薪。いわゆる，木を切って木の枯れたやつを集めてきて，これでご飯を炊いた。そうするとね，薪というのは，那覇の人たちにとって，大事な物資なんですね。那覇は，薪取れませんから，どうしてもヤンバル辺りから買ってこなければいけない。そうすると，与那原は，今埋め立てていますけど，立派な港でしたから，太平洋側のヤンバル辺りからヤンバル船で薪を与那原に積んできている。

汽車が通る前は，こういう仕事を誰がやっていたかというと，荷馬車なんですね。与那原から那覇までたくさんの品物を運搬してきたんですね。また逆に，酒であるとか米であるとか，ソーメンであるとかですね。こういうものは，那覇から与那原に運ばれて，与那原からヤンバル船で運ばれて国頭や離島に行ったんだね。

誰かがサトウキビの話をしましたけど，与那原の近くの西原に大きな製糖工場があったの。今，サンエーか何か，大きな建物が出来ているみたいだけど，その辺りに大きな製糖工場があって。この製糖工場で出来る，いわゆる砂糖ですね。これを那覇に運ぶのに使われた。さらに，汽車というのは，あんまり坂のきついところでしたら動くの大変ですのでね，那覇と与那原の間は平坦だったので，最初沖縄に鉄道を敷くには鉄道を通しやすかったということでね。那覇と与那原の間には，最初に鉄道が敷かれたということでしょう。

それから，鉄道が出来た頃の沖縄の産業というと，砂糖しかありませんでした。ですから，当時嘉手納には，製糖工場がありました。その製糖工場の砂糖を那覇に運ぶ。製糖工場にサトウキビを運ぶために，どうしても汽車が必要であったということですね。そういう意味で，嘉手納の方に出来た。糸満は，魚の町なんだけど，糸満の方も高嶺というところに大きな製糖工場があった。ですから，この製糖工場の砂糖を運ぶ，あるいはサトウキビを運ぶために汽車が使われた。ということで，こういう３つの路線が敷かれたんです。

ところで，皆さん，ちょっと気になりませんか？与那原線は，大正３年に出来たんでしょ。そして，その最初の与那原線を作るときにですね，与那原線が出来たらすぐ，糸満線を作る予定だったんです。だから，大正３年に与那原線を作って，大正４年には糸満線を作る予定だった。だけど，当時は，第一次世界大戦っていう戦争があったんです。この戦争のために，お金の準備が出来なくて，沖縄県は糸満線を作ることが出来なかったんですね。それで，与那原線を作って，しばらく沖縄では鉄道は無理だということでほったらかしにされた。それを国が補助するということで，嘉手納線と糸満線ができる。ついでに言いますと，与那原線はね，敷設費が30万位かかっておりますけど，この30万っていうお金は，沖縄県が借金をして作った鉄道なんです。

赤十字社から30万というお金を借りて，これを作った。だから，これ全部借金をして作ったわけです。だから，沖縄県はこれ以上借金は出来ないというので，糸満線は作れなかったわけですね。その後，先ほどどのくらい費用を使ったのかという話がありましたけど，嘉手納線が，国が大部分，県も少し出してですね，ちょっとはっきりした金額は憶えてないんですけど，102

万位ですか。この位かかっております。糸満線はですね，これは全額国がお金を出しました。63万円かかっております。ですから，与那原線に約30万，嘉手納線に102万か３万，それから糸満線に63万円という金をかけております。

先ほどね，軌道とかっていう話がありましたね。「軌道」というのは，線路そのものが「軌道」なんですね。ですから，与那原線でしたら，那覇から出て与那原までの線路。これが，「軌道」。距離は約9.7キロ。９キロちょっとあまりですね。汽車はレールがあって，この上を走っているわけですね。恐らく誰かが，軌道70cmあまりだという話をしたのは，ちょっと勘違いをして，この間のものを軌道というふうに間違えたのだと思います。この間はね，なんていうかと言うと，軌道じゃなくして，「軌間」といいます。レールとレールの間を軌間。レールは幅がありますからね。内側ですね。内側の広さが，軌間ですよ。沖縄の鉄道の軌間はいくらでした？誰か，70cm位とか言っていましたね。実際は，76cmですね。

もし，実際はどれくらい何だろうと見たければ，那覇に東壺川公園という，那覇市のアパートのある小さい公園がある。その公園に，当時のレールをそのまま置いてあります。じゃあ，今のね，沖縄の鉄道には関係ないけど，新幹線はどのくらいだと思う？

新幹線はね，1435ミリだから，１m45cm位の幅。この1435ミリという幅が，イギリスに行ってもアメリカに行っても世界の軌道の標準なんです。そして，新幹線が出来る前，日本の鉄道の軌道はいくらだったかというとこれが，明治の時代に日本に鉄道が出来たときの軌間なんですね。みなさん，軽便，軽便って言ってましたね。軽便というのは，この標準の軌間よりも狭い軌間の鉄道を軽便というんです。必ずしも，760ミリでなくてもいいですね。1067㎜より狭い鉄道を，日本ではこういう呼び方をしています。本土に行くとみんなケイベンと言うんですけど，沖縄では，ケイビンと言ってるんですね。

ところで，汽車が通っていた時代，戦前の話ですが。バスが通っていたんですね。大正時代からバスが通っていまして，車というのは，皆さんよく知っているように，非常に便利ですよね。道があればどこでも入っていく。鉄道というのは，決まったところしか通れないし，駅も固定されて，そこで降りたら家に行くまで歩かなければならない。しかし，当時バスというのは，村の中まで入ってきているから，便利です。村の人たちはバスが通るようになったら，便利なバスの方に移っていくわけですね。そうすると，何が起こるかというと，今まで汽車を利用していた人たちが，汽車に乗るのを止めてバスを利用し始めるわけ。そうすると，鉄道は経営難というのかな，乗る人が少ないから収入が減って困るわけ。そこで，沖縄県は，「もう少しお客さんにサービスをしてやろう。」，ということで走らせたのが，ガソリンカーなんです。昭和５年，1930年の時です。もちろんこれは，鉄道ですよね。レールの上をガソリンカーで走らせるわけですから。そうするとね，那覇と嘉手納の間をですね，昭和12年頃で言うと，１時間と12，３分位で走っていたのが，ガソリンカーとなると１時間では着く。利用客にとっては，10分以上も短縮されますから，非常に便利になるんですね。それで，ガソリンカーを結構ね，走らせております。ガソリンカーというのは，車のエンジンでね，車のタイヤの代わりにレールの上を走る車輪を付けて，その上を走ったものだと思え

ばいいです。

でも，戦争が近づいてきたらガソリンの配給が少なくなって，運行も減ります。だけど今度は，何が起こったかって言うと，バスを利用していた人たちが，ガソリンの配給がないので，バスがうまく動かないんですね。じゃあ，バスは何で動かしたかというと，バスは，木炭で動かしたんです。今で言うボイラーみたいなやつを備え付けてね，木炭を入れてグルグル回して，バスは動いていました。でも，故障が多いんですね。ですから，バスには乗ったけど，いつ目的地に着くか分からない状況だから，今度は逆に，バスを利用していた人たちが鉄道の方に帰ってくる。と言うのは，当時戦争が近づいてきても，石炭はですね，十分とは言えなくても，汽車を走らせるだけの石炭はありましたので，石炭を使って汽車は運行をしていたわけです。

それから，嘉手納線を作るときですね，レールを敷くためには土地が必要ですから，この土地をなかなか確保できないんですね。それで，昔の地図でレールを見ますとね，レールの敷かれているところとか駅とかというのは，ほとんど畑の真ん中だとか，あるいは人里離れた田んぼの真ん中だとか，そういうところに駅がある。ですから，いかにね，土地を買うのに困ったことがわかります。

あと一つだけね，与那原線のことで昭和天皇のお話をしていましたね。皇太子の時に，与那原の駅に降りて，与那原から那覇に汽車で来たって。与那原の駅というのはね，今も残ってるんですよ。外から見えないけど，与那原にＪＡのスーパーがありますけど，このＪＡのスーパーの一部は昔のコンクリート造りの与那原の駅なんです。その跡を探せば，今でもいくつか残っている場所があります。

さて，その程度で説明は終わって，後は質問があったらお答えしたいと思います。

あやか　人がいる駅には，男性の人しか働いていなかったって，さっき言ってたんですけど，駅弁とか売っている売店とかには女性の人もいたんですか？

金　城　多分売店には，女性がいたと思いますよ。駅員とか汽車に関係するような仕事は男性でしたけど，売店には女性がいたと思います。

たいち　火の粉で民家に火が付いて全焼したっていうことが話し合いで出ていたんですけど，民家に住んでいた人はどうなったんですか？

金　城　僕もね，今日の話し合いで大謝名の方で，家が焼けたというのは初めて聞きましたけど，糸満線ではね，民間じゃなくして，牛小屋とか豚小屋みたいなところが焼けたという話は，何度か聞きました。それから，サトウキビ畑が焼けたというのも，頻繁にあったようです。民家が焼けたというのは今日初めて聞きました。逃げたんじゃないんですか。

たかふみ　軽便鉄道の中には，今みたいにトイレはあったんですか？

金　城　いや，なかったですね。沖縄の鉄道というのは，長いところで１時間くらいでしょ？汽車の中にはありませんでした。

ひなこ　さっきの火事の話に戻るんですが，そういう火事を起こした場合，軽便の会社ってゆうか，軽便を経営しているところは，損害賠償をしたんですか？

金　城　そこまでははっきり分からんけど，そりゃあ損害を与えているわけだから，賠償したと思いますよ。記録を見るとね，何かそういうものに金を使ったと書いてありましたのでね。賠償したと思います。

けんいち　軽便を作ろうといった人はわかりますか？

金　城　明治の27年頃にね，本土のお金持ちの人たちが，沖縄で商売をしようじゃないか，それには鉄道を敷いた方がいいということで，計画をしたんです。でも，当時の日本は，日清戦争をしていまして，戦争にお金を使いすぎていたんですね。結局，鉄道を敷くお金を集めきれなかったんですよ。それからしばらくして，明治の36年頃にも鉄道を敷こうという話があったけど，このときもまた，日露戦争という，今のロシアと日本が戦をして大変なお金を使ったので出来なかった。それでね，軽便を敷こうという話がでたのはね，明治の43年，1910年かな。日本の政府がケイベン鉄道法という法律を作ったんだ。

　ケイベン鉄道法ってゆう法律を作ってね，沖縄にケイベン鉄道を敷こうと言って，まず働きかけたのは，当時，沖縄の県議会のように沖縄県会という県から選挙されて集まった議員達がやる県会がありました。その県会でね，沖縄に鉄道を敷こうじゃないかという話が持ち上がったんです。ですから，沖縄の県会が沖縄にも是非，鉄道が欲しいということで，当時の県庁に考えろと要請して，県庁が調査をして計画を立てたんですね。それから，先ほど時速の話が出ていたね。40キロから60キロという話があったけど，こんなに速いもんじゃありませんでした。ガソリンカーとしてもね，せいぜい30キロ足らずですよ。とゆうのはね，那覇から嘉手納まで23キロですよね。これ一時間で走るとなるとどうなる？時速23キロですよ。だから，バスみたいに40キロから60キロみたいのは，到底走っていない。もう，せいぜい20キロくらい。20キロ位だから，ちょっと坂になると，途端にスピードが落ちてしまう。

けんいち　そんなに遅かったんですか？歩いた方が速い。

金　城　うん。坂の時は，時速５，６キロぐらいになって。それでね，先ほど誰かが言ったようにね，タダ乗りして途中で降りたりとか，走って行って追っかけて，後ろにぶら下がっただとか言ってましたけど，これはね，平たんな所では出来なかったようだけど，少し坂になるとスピードが落ちるから，人が走っても追いつくくらい。

のぶたか　ガソリンカーで25，６キロだったんですか？

金　城　ガソリンカーで25，６キロぐらい。

のぶたか　じゃあ，軽便鉄道の速さは？

金　城　軽便鉄道は，22，３キロ位でしょうね。20キロ位だと思います。それと，もう一つ面白い話をするとね，この辺りも坂道が多いですから，雨が降ると軽便ですから，車輪がきしんで空回りをして，中々ちょっとした坂でも上がれなかったそうです。じゃあ，何をしたかというと，雨が降る日は，車掌が砂袋を持ってきてレールに砂を撒いて走りやすくしたようです。

担　任　もう２時間近く，金城先生と一緒に軽便について学んできました。授業のまとめということで，金城先生に今日の授業の感想を頂きたいですね。

金　城　先ほどもお話しましたようにですね，グループで色々調べたようですけど，大山駅の駅長の息子さんの古波蔵さんという人を，今日初めて知りました。それから，そのお父さんが昭和天皇が皇太子の頃のお召し列車の運転士だったということも，今日初めて知りました。機会があったら，話を聞きたいなあというふうに思います。確かに関係者に話を聞いたらですね，いろんな情報が入ってきます。例えば，実際に鉄道に関わった人のお話と，それから利用した人のお話の中には少々食い違い

があると思うんですね。実際，鉄道に勤めた人はこうだったけれども，利用した人はいや違う，こうだったというふうなことで，話はどうも食い違っている場合がある。そうゆうふうに食い違っている場合，どうゆうふうにして，整理していくのか。

もし今度ですね，鉄道のお話を聞きたい，あるいはその場所をですね，鉄道に興味を持ってくると，一体どこを通ってたんかなあと場所を見たくなるんですね。まあ，軽便橋というのがありますけど，あの軽便橋は，この近くでは唯一残っているところなんですね。だけど，那覇に行きますとね，汽車が通っていた跡のコンクリートの跡だとかね，こういうのが残っております。皆さん，もし何かこれを機会に，鉄道の勉強，あるいはモノレールも開通しましたのでね，モノレールの話も含めて，勉強するかと思いますけどね。ますます，調査の方も続けて下さい。恐らく，最後のまとめには素晴らしいものが出てくるものだと思います。もし，何かわからないものがありましたら，先生を通してでもいいし，私の方に直接質問でもして頂いたら，私は答えられる範囲内で，お答えして，手助けしていけたらなあと思っております。

7．記録4　佐喜眞昇さんと字神山について語り合う

担　任　今日は，宜野湾市立博物館長の佐喜眞さんを招いて，戦前の宜野湾村について考えを出し合って語り合おうということです。早速，安仁屋のことについて，友だちに聞きたいなというものがあれば，宜しくお願いします。

いつき　安仁屋では，村長さんと国会議員，校長先生は偉い人と言われていたようです。その他の人たちには，そうですね，身分には差がなかったということでした。

ひとし　安仁屋には上下関係がなかったってことですか。

みちる　安仁屋には，あんまり村長になったりとか，村から出るようなえらい人は少なかったということも言えるのではないですか。

ひなこ　いつきさんが言ってるのは，安仁屋には昔，村長と校長先生，あと国会議員？以外はえらいって思われていなかった。それで，えらい人は少ないって言ってるんだと思います。

いつき　他にも役所の人とか，そういう人もいたけど，村長と校長と議員以外は偉いと思われていなかったということだと思う。

担　任　この当時，安仁屋出身の国会議員っていたの？

いつき　宜野湾から，衆議院が1人。

担　任　宜野湾から，衆議院の議員さんが1人いた。ということは，安仁屋出身なの？

いつき　安仁屋の出身かは分からないけど･･･。

担　任　わかんないけど，宜野湾村から国会議員が1人いたけど，安仁屋出身かどうかは分からない。この点は，佐喜眞さんに後で聞きましょう。

あいり　戦前は普通の人は着物をつけていたんだけど，でも，お金のある人は洋服を着ていたようです。

ひなこ　お金がある人，お金持ちみたいな人だけじゃなくて，役所に通ってた人の一部とか，郵便局に勤めてた配達員とかも，洋服，制服などを着ていたそうです。

ゆ　い　別の質問ですけど，ひなこさんの，戦前・戦後の小学校とあるんですけど，その小学校の様子を詳しく教えてください。

ひなこ　戦前に，宜野湾の方に大山小学校という小学校がひとつあって，その小学校で，勉強などを教えていたそうです。

いつき　大山小学校だけじゃなくて，戦前は普

天間小に通ってて，戦後は大山小へ子ども達は通っていた。

担　任　ちょっと待ってよ。じゃあ，戦前は普天間しかなかったの？

たかふみ　戦前は普天間小１つしかなくて，他にはなかったのかな。宜野湾市内には，小学校はなかったのかなぁ。

みちる　この前の話し合いでは，きりこさんが言ってたように，尋常小学校っていうのがあるって言ってたんですけど，それも小学校だから，戦前には，もっと小学校があったと思うんですけど…。

ひなこ　農繁期になったら，人手が足りないので，めんどうみてあげられないから，ムラヤーっていって，今の保育所みたいな所で，こっちに写真があるんですけど，農繁期保育所ってあって，ムラヤーに預けられていたそうです。

担　任　ああ，じゃあ，ちょっと関連して言うと，学校の数については今はちょっと分かんない所があるよね？だけど，ムラヤーっていうものが村内にいくつかあって，忙しくなったら少し大きな子ども達は，お父さんお母さんと一緒になってお仕事をしているかもしれないし，小っちゃな子ども達は集められて，保育所みたいな所で，ムラヤーっていうのがあったと。

きりこ　私がこの前の話し合いの時に，尋常小学校っていうの，尋常高等小学校っていうのを出したんですけど，それは戦前の事なんですけど，その戦争が始まろうとしている時から，国民学校っていうのに変わって，その国民学校っていうのが確か２つ，宜野湾には大山小と普天間小の２つって聞いたんですけど。

ひとし　大山小と普天間小って言ってたんですけど，この２つは安仁屋の子ども達が行っていた小学校なんですか？

ひなこ　安仁屋の子ども達だけではなくて，他の集落っていうか，新城とか，安仁屋周辺の集落からも，どこだったか場所ははっきりしてないけれど，来てたみたいです。

担　任　ではここで，佐喜眞さんに，戦前，学校は村内にいくつあったのか，それから，国会議員の話が出てきましたけれども，宜野湾村から国会議員がいたのかどうかですね，この辺りについてコメント頂けますか？

佐喜眞　おじさんは戦後の生まれなので，これから話すことは，私の両親や祖父母，また周囲の先輩方からの話です。さて，村内には今の宜野湾，飛行場の中になっているんですけども，そこには，宜野湾尋常高等小学校というものがあって，今の宜野湾小学校につながっております。県内でも伝統ある学校です。おじさんの時代までは，いわゆる併置校，小学校と中学校１つの学校，同じ敷地内で校長先生もお一人，教頭先生もお一人ということで，先生方は小学校の先生と中学校の先生がおりました。また先生方は，体育などにおいては，同じ先生が小学校も中学校も教えるという状況でございました。終戦直後の場合は，今の役所の後の方に，南校，北校ということで２校の学校があったわけです。その後に，普天間小中学校，それから大山小中学校，宜野湾小中学校ということで４校になりまして，その後から，現在のような小学校は小学校，中学校は中学校というシステムで，学校制度はできたわけでございます。次に国会議員ですね。その頃は，中頭郡という形で，そこから何名という形で国会議員が出たわけですけれども，宜野湾からもお一人，国会議員に出られたということですね。名前はちょっとド忘れしてますけれど。

担　任　話は佐喜眞さんから皆さんにもどしましょう。いつきさん，安仁屋の報告をお願いします。

いつき　もともと宜野湾は，浦添や北谷や中城から土地を分けてもらって，宜野湾は出来たらしい。安仁屋は北谷からの土地をもらって安仁屋になったそうです。

ひなこ　安仁屋は昔，周りの集落から，少しずつ土地を分けてもらって，やっと安仁屋ができて，安仁屋って集落は本当は無かった集落で，途中からできた。

いちろう　なぜ北谷から土地をもらって，安仁屋を作ったんですか？

いつき　そこまでは調べていません。

みちる　ということは，安仁屋は歴史が浅いということになるんでしょうね。他の集落と比べて。

ひなこ　安仁屋に住む人は，どういう所から来た人なんですか？

のぶたか　もともと安仁屋っていうのはないっていうことだから，つまり，安仁屋の人たちもいなかったって訳だから，安仁屋を作った時に，その人たちはどこから来たのかっていうことだと思う。

担　任　西原とか浦添とか，その周りの人達が集まって来たということですかね。

あやか　さっきのいつきさんの，北谷からの土地っていうのは，なぜ，北谷から土地をもらって，安仁屋を作ったのか？

きりこ　私が持っている資料には，宜野湾村は，浦添間切から10ヶ村，中城間切から２ヶ村，北谷間切から２ヶ村を集めてできたものって書いてある。

担　任　きりこさんの資料によると，そういった所の村々の土地をもらいながら，宜野湾村が出来てきたんだね。間切というのは，村っていう意味なんですよ。

けんいち　あいりさんのカードには「キャンプ瑞慶覧の中」と書いているんですけど，それはどういう意味ですか？

あいり　安仁屋は現在，キャンプ瑞慶覧の中の建物が多い所になっているということです。

担　任　キャンプ瑞慶覧といって基地になってるでしょう。実はそこの中が，昔，安仁屋という集落だったわけだ。そこは，今の北谷町に近いわけ。もう隣なんです。

あやか　というか，北谷町の中に入ってるよね。

担　任　北谷の中にすでに半分入っているような感じね。そこから土地をもらったっていう可能性は非常に強いよな。安仁屋についてはこの辺りでいいですか？では，神山のことについて質問したいことありますか？

あきひと　カツアゲがあった，というのは，どういうカツアゲだったんですか？

さ　ほ　昔は，子ども達はお金があまりなかったので，今のカツアゲって言ったら，お金をボスみたいな人が奪い取るっていう感じだと思うんですけど，昔のカツアゲはお金の代わりに，黒砂糖とか，あとサトウキビをその家の子どもに盗ませて，ボスにあげるっていうか，ボスが奪うみたいな感じだった。この話は玉那覇昇さんに聞いたよ。

あやか　黒砂糖や，サトウキビっていうのは，誰もいない間に家の中に入って盗ったんですか？それとも，なんか今やってるみたいに，道路とか歩いている人のを「おい！」みたいに脅して盗ったんですか？

あ　き　さほさんに代わって答えます。砂糖とか米とかをしまう倉みたいな所があって，そこの壺の中に砂糖などを入れていたようです。一番下の方に砂糖を置いて，その上に大豆を置いて，砂糖が見えないように隠していたそうです。

担　任　砂糖が見えないようにしたってのはどうして？子どもが盗るから？

みちる　私は沖縄は湿気の強い場所だったので，湿気を取るために砂糖の上に大豆を置いたというのを聞きました。

ゆ　か　神山についての，あきさんが書いた「鐘の役割」について教えて下さい。

担　任　神山に鐘があったらしいんだけど，この役割は何ですかっていう質問だね。

あきさん，どうぞ。

あ　き　若い人達が集まって，町の見回りみたいなことをしたり，火事があったりしたら，鐘を何回か鳴らして，火事があるから集まれ，みたいな感じでやったりしたそうです。

さ　ほ　あきさんが言ってたように，青年団とかが鐘を鳴らしたそうです。あと，火事とか泥棒とかがあった時に，鐘の鳴らす回数が決まっていたようです。

たいち　あきさんに質問ですけど，火事の時に鳴らす音は何回かっていうのはわかりますか？

あ　き　火事の時は大変だから，連打してガンガン鳴らしたそうです。泥棒の時は2回で，青年団の時は3回だったと思う。

ひなこ　今の鐘の鳴らすことと関係していると思うのですけど，沖縄での戦争中も「空襲警報」で鳴らしていたんですか。

あ　き　青年団の集まりとか火事の時とか，泥棒の鐘の鳴らし方については，話を聞いたんですけど，戦争中の話はちょっと聞いていません。

しゆう　ところで，あきさんのカードに「ニワトリの放し飼い」って書いているんですけど，何ですか？

あ　き　ニワトリの放し飼いっていうのは，ニワトリを自分達の敷地だけで飼っていたらニワトリがかわいそうだからって，放すようになって，そうしたら，ニワトリが逃げてしまったようなんです。だから，足に長いひもを巻き付けて，家の柱みたいなところに巻き付けて放し飼いにしてた。

さ　ほ　青年団はニワトリを放し飼いにしてる所を見つけたら，定期的に青年団が村の人に内緒で見回りに来て，勝手に取って食べたこともあったみたい。だから，みんな取られるのいやだったからひもをつけたみたい。あと，卵をどこに産んだかがわかるためにひもをつけた。

担　任　ずっと放し飼いしちゃうと，もうどこで卵を産んだのか分かんなくなっちゃうので，ひもをつけたということだね。

いつき　宜野湾の神山までわざわざ国頭方面の人がアルバイトに来ていたらしいけど，もう少し詳しく教えて下さい。

さ　ほ　宜野湾はヤンバルと比べて，土地がとても広かったので，ヤンバルの人たちが神山とか安仁屋に出稼ぎみたいに来ました。宜野湾に住み込みで農業を手伝って，それで給料をもらって，またヤンバルに帰ったんです。

担　任　国頭は土地が，なかったの？

さ　ほ　山が多いし畑は少なかった。

担　任　神山とか安仁屋の方が土地があって，そこにアルバイトで来てるんだね。

あきひと　アルバイトをしている人たちは，1時間にどれくらいもらってたんですか？

あ　き　1日とか1時間とかじゃなくて，1年に何円とかなんですけど…。1年契約とかそういうことで給料を払っていたみたいです。

たかふみ　あきさんに質問なんですけど，契約した人が仕事をよく頑張って一杯役にたったら，契約金とかは変わったりしたんですか？

あ　き　働く前に，一年間働くから何円下さいみたいな感じで契約したんだから，頑張ったから増えるとかじゃなくて，契約だから，その約束通り払うと思う。

ひとし　さほさんに質問なんですけど，他の所にもアルバイトに行ってたりしてたんですか？

さ　ほ　古波蔵恵昭さんが言うには，宜野湾村は他の村に比べて，先祖代々の土地を持っている人が多かったから，それで，家族だけでは土地の収穫が間に合わなかったので，国頭の人とかが手伝いに行っていたそうです。

担　任　ちょっと整理すると，宜野湾村に住んでる人は土地を持っている人，これ，土地所有者って言いますね。先祖代々の土地所有者が多かったから，多いと

いうことは，畑が一杯あるということだから，やっぱりたくさん物がとれるので，人手が足りない。収穫期になってくると人手が足りなくなってきますので，それで，国頭の人たちに声をかけたということですね。

みお　神山に村長がいたっていうのは，どういう意味ですか？

すぐる　神山出身の村長がいたということです。

佐喜眞　村長が出ておりますよ。

担任　神山出身の？

佐喜眞　はい，神山から２人。

担任　今ね，佐喜眞さんの話によりますと，神山出身の宜野湾村長が２人出ているそうです。すぐる君，何か付け足しありますか？

すぐる　一人は山城吾郎さん。

佐喜眞　もう一人は，高江洲英昭だったかな。英語の英に昭和の昭。

りんさく　神山のカードに※「模合（もあい）」をやってたって言ってるんですけど，「模合」って何ですか？

ゆい　田舎では，近所づきあいがよくて，「模合」というものをやっていて，「模合」とは，お金を貸し合ったり，情報交換をしたりすること。

のぶたか　「模合」したって言うんですけど，何名位でやってたんですか？

あき　玉那覇昇さんが言うには，５・６人とか，そこまで多くない人数でやっていたそうです。

ひとし　模合は沖縄の方言なんですか？沖縄だけじゃない，本土とかでも模合って言ってやったりするんですか？

さほ　模合ってのは，辞典にも載ってないから，多分沖縄だけだと思う。

ひなこ　私のおばあちゃん，前は宮古に住んでて，今沖縄に移ってきてるんですけど，「模合」って古くから宮古でもやってたし，他にも，埼玉に叔母さんがいるんですけど，その叔母さんのお母さんも本土で結構古くから「模合」やってたよって言ってた。

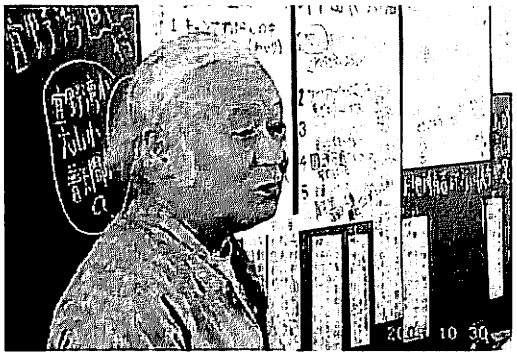
※もあい（模合）…島民のあいだでもたれた相互扶助的な金融組織のこと。一般に頼母子講（たのもしこう）・無尽講（むじんこう）とよばれるものと同質のものである。

たくみ　別の質問なんですけど，宜野湾村で野菜なんかを作った人は那覇に行かないで，村内の市場で売ってたんですか？

きりこ　宜野湾の市場にもたくさん人が来るから，だから宜野湾で売ったんだと思います。

あやか　きりこさんに付け足しですけど，宜野湾の並松街道には，普天間神宮とかに行ったりする，偉い人とか，そういう人達がよく，宜野湾の方に来たり，競馬とかをやりに那覇から役所の人たちとか来たりしていたので，宜野湾の市場ってのは，かなりの人たちが集まったらしいです。

担任　それなりに宜野湾の市場っていうのが大きいから，那覇に持って行くよりも，ここで売ったほうがいいということですね。さて，ここで，佐喜眞さんの方に，安仁屋と神山についてお話を頂けませんか？



佐喜眞 昇さんの話を聞く

佐喜眞　キャンプ瑞慶覧の中に安仁屋はもう組み入れられまして，昔の安仁屋の地域は，現在はキャンプ瑞慶覧の中で，その時住んでいた皆さんは，野嵩や普天間の方に大方住んでいます。それか

ら，神山においてですね，先ほどもありましたけど，模合制度，これも困った人を助けようという制度ですね。みんなでお金を出し合って，そのまとまった金で家畜などを買う。豚とか買ったり，牛とか買ったり，馬を買ったり。場合によっては土地を買ったり。という形で，一月交換で，例えば10名なら10名，15名なら15名でということで，毎月交代でお金を出し合って，それをまた誰かが取る，という。そしたら確実なお金が入ってくる。また，家族が病気した時はお金がかかるので，それを病院での支払いの足しにしたりと。本土では，向こうにもそういう制度はありはします。これもまた，お互い気の合った，近所づきあい，お友達，親戚同士ということで，例えば，まあ，そういうことは少ないんですけども，事情によってお金が払えなくなった場合などは，他の皆さんが困りますので，みんながスムーズに助け合う制度というのが，この模合制度であります。それから，さっきカツアゲの話があったんですけども，これはひとつの，子ども同士のイジメといえばイジメにもつながりますけども，おやつなど食べるものがないので，砂糖を持ってきて食べさせなさいとか，あるいは，あめ玉を持ってきて食べさせなさいとか，そういう風に先輩方，いわゆるリーダー的なイタズラのメンバーが，そういう風に後輩などに言って，せびって食べたといういきさつもあります。

にわとりの放し飼いもですね，隣近所の畑を荒らす，あるいは野菜をこの鳥が全部食べてしまうということから出たことではあります。人の迷惑にならないように，お互い今でも迷惑にならないように社会は成り立つべきですけど，場合によっては違反をする人もいます。そういう違反をしないようにということで，青年会の役員が中心になって，注意し取締り，なんべん注意しても聞かなければ，あとはもう，これは没収しますよ，ということで，役員が公民館（ムラヤー）に持っていったわけです。それから，逃げないように鶏の足に古くなった下駄などをつけて，あるいはひもをつけて逃げないようにして飼っておりました。

国頭の方からのアルバイトですが，国頭は土地はあるんですけど作物がなかなか実らない，土地がやせている訳ですね。中・南部が肥沃であるわけですので，肥料を入れなくても北部の土地に比べたら，きびなども作りやすいわけですね。現金収入を得るために北部の皆さんが，お金を前借してふるさとに送って，６ヶ月契約とか１年契約とかということで，住み込みで働くわけです。この住み込みでそこの家族と一緒に生活をして働くわけですね。きび作がお金に一番換金しやすいわけですので，人手がいりますので，北部の皆さんは中・南部に大方出稼ぎに来ております。女性の皆さんは，本土で紡績などで働いていますけども，男性の方は大方が県内であれば，中部できび作にあたっております。

今は広報マイクがいつも働いているから，公民館から，あるいはもう学校でも始業の時間，終業の時間チャイムで，ブザーで合図するはずですけども，戦前はそれがありませんので，それを伝えるのが鐘のことで，公民館の所に，また各班の要所要所に下げ，例えば２回打ったら青年会の集まりですよ，お母さん方，婦人会の集まりは３回ですと，班長さんは４回ですよ，と。ですから各地域で異なることではあります。火事などの非常の場合は切れ目なしにずっと打つわけですね。これをみんな聞き分けて，ああ今日は何の集まりか

ね，と言って，公民館に集まって審議をするわけです。火事はもう切れ目なし，泥棒などの場合は，青年会の鐘の合図を時間を短くして打つわけですね。同じ３回にしても。それをみんな聞き分けて，連絡を取り合って，火事などの場合は全部の集落，１ヶ所が鳴ったらそれを聞いて各班も打ち鳴らして，全部の集落の方が出て対応をしておりました。これも１つの生活の知恵ですけども，今みたいに広報システムがないので，こういう方法をとっております。それから那覇に野菜を出すということですけども，那覇に持っていってもできはしますけども，宜野湾村の役所もそこにありますし，学校も市場もそこですね。だから，那覇に行くなら，軽便鉄道などに乗っていかないといけませんので，その辺の節約も兼ねて，野菜などは宜野湾の市場に出している状況です。しかし，ある程度は皆，自作で自分の生活は野菜も大方作っておりますが，場合によっては野菜を作る畑がない関係で，買って食べる人もいますので，市場でのやりとり，イモを持って野菜を買う人もいれば，また野菜を持ってイモを買ってくるとか。いわゆる物々交換みたいなことで市場も成り立っている状況であったようです。

8．制 作 <大型紙芝居>基地に消えた村ーるん太とクロの探検ー

私たち，琉球大学附属小学校６年３組は，総合的な学習の時間で，昔の宜野湾村のことについて調べてきました。普天間基地がつくられる前の宜野湾村，沖縄戦が起こる前の宜野湾村のことです。そこには，のどかな風景がありました。軽便鉄道が走り，松の並木が人々を楽しませていました。市場はたくさんの人々でにぎわっていました。

このお話は，いまでは普天間基地に消えた村，基地にのみこまれた村を，小学校三年生のるん太とクロがタイムスリップして探検していくものです。

①の場面［リビングで家族全員がくつろいでいる場面］

お父さん……「やっと，宜野湾に夢のマイホームができたなあ。」

おばあちゃん…「でも，新しい家はなかなか，なれないね。」

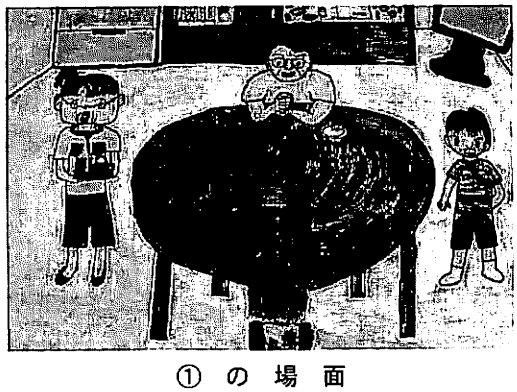
るん太……「そうかな？　僕はもう，なれたけどなー。」

お母さん……「るん太，新しい学校はどう？」

るん太……「うん。まあまあかな？友だちもたくさんできたし。」

るん太は琉大附属小学校の三年生。動物好きな男の子。

ある日，飼い犬のクロと家の庭でボール遊びをしていたときのこと。



① の 場 面

②の場面［急ブレーキをかけた車の前に立ちすくむ，るん太］

るん太……「ほら，クロいくぞ！　それ！！」

クロ……「ワン・ワン」

るん太……「あっ，しまった。強く投げすぎた！！」

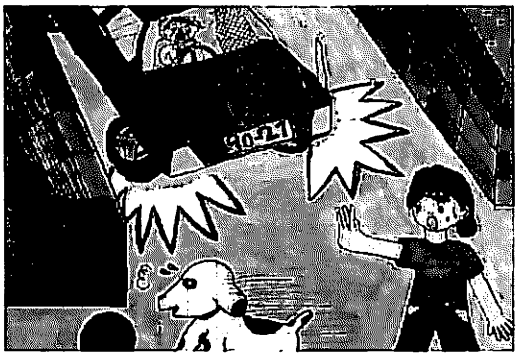
クロがボールを追いかけて走っていった。

ボールは道路に転がり，クロも飛び出してしまった。

１台の車がものすごいスピードで走ってくる。

るん太……「クロ，あぶない，ひかれる！！」

るん太は思わず目をつぶった。



② の 場 面

③の場面［クロとるん太が軽便の中で話している場面］

るん太は，恐る恐る目をあけた。すると，いつのまにか，汽車の中に座っていた。

るん太……「あれ？ここはどこ？」

るん太は，つぶやいた。

クロ……「るん太，君は時間をこえて，この時代に来たんだよ。ここは，60年前の宜野湾村だ。この頃走っていた軽便の中にいるんだ。」

その声は，隣に座っていた同じ年くらいの男の子だ。

るん太……「ねえ，君は誰？」

クロ……「僕はクロ。君が飼っている犬さ。今は人間だけどね！　ぼくのご先祖様は，昔，この宜野湾村に住んでいたんだ。だから，いろいろ話を聞かされてきたから，この村のことは，くわしいよ。るん太にも教えてあげるね。」

るん太……「・・・ん？　つまりここって，昔の沖縄？戦争前の沖縄なのかい？」

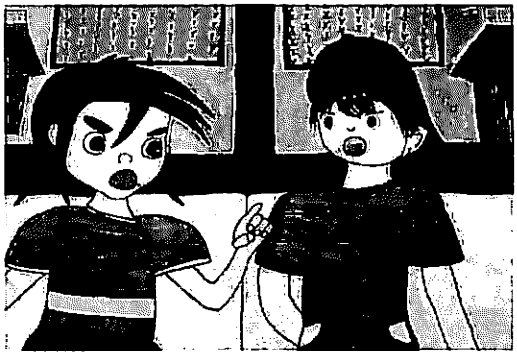
クロ……「あぁ，そうだよ。」

クロの話に，るん太はびっくりした。

るん太……「どうするのさ，家に帰れないよ！！」

クロ……「るん太，ちょっと落ち着いて。もといた世界の時間は止まっているんだよ。だいじょうぶ。ぼくがいるから。」

るん太……「そっかぁ。心配しなくていいんだね。本当に大丈夫なんだね。」



③ の 場 面

④の場面［軽便の中で話している場面］

るん太……「あの，さっきから気になっていたんだけど，今乗っている軽便って何？」

クロは軽便のことについて教えてくれた。

クロ……「昔，沖縄で戦争があったでしょう。その戦争前に，沖縄で走っていた鉄道のことさ。那覇に大きな駅があって，この村にも走っていたんだよ。るん太の時代でいうとモノレールみたいなものだよ。スピードはあまり速いってわけじゃないけどね。歩くことが普通だった時代には，すごい乗り物だったと思うよ。」

るん太……「そういえば，あんまり速くは感じないね。」

クロ……「軽便には，石炭を使うものとガソリンを使うものがあったんだ。」

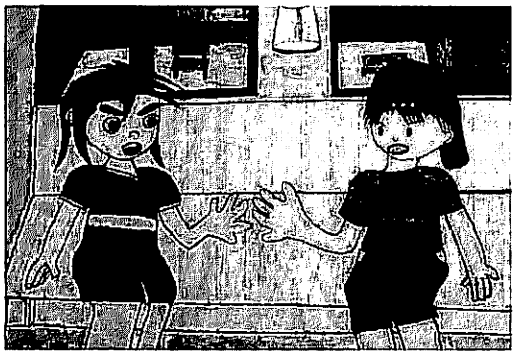
るん太……「ふうん。昔も，ガソリンが使われていたんだね。」

クロ……「ねぇ。るん太，この村を探険

してみないかい？」

るん太……「探険！いいね。それ！！」

クロ……「じゃあ，今は真志喜駅だから，このあとの北谷駅で降りよう。」



④ の 場 面

⑤の場面［町の中で話しながら歩いている場面］

るん太とクロは，北谷駅で降りて，村を探険することにした。そこは，田んぼやさとうきび畑がたくさんあった。

クロ……「戦争が終わると，アメリカの基地に土地を取られたんだ。この近くに安仁屋という村があるけど，今は基地の中だよ。それから，新城とか神山とか…。」

るん太……「それじゃあ，その土地を取られた人はどうなったの？」

クロ……「新しく住む場所をさがしたり，外国に出て行ったり，それは，大変な目にあったらしいよ。中には，基地の周りに住んでいる人もいるよ。」

るん太はなんだか悲しくなった。

クロ……「ねぇ，るん太。僕らの時代には消えてなくなった，安仁屋と神山に行ってみる？」

るん太……「うん！　行ってみたい。連れてって。」

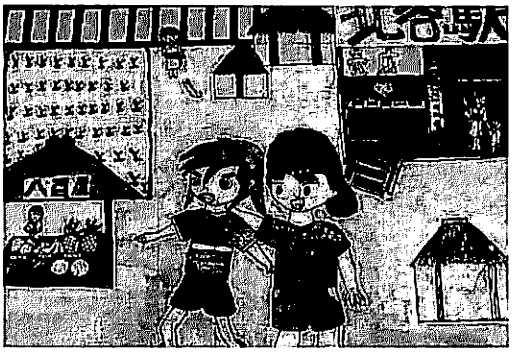
⑥の場面［田んぼや畑の前で話している場面］

しばらく歩くと安仁屋についた。

クロ……「ここが安仁屋だよ。」

るん太……「畑や田んぼぐらいしかないね。」

クロ……「そうなんだ。安仁屋には，



⑤ の 場 面

280人ぐらいの人が住んでいて，イモや野菜などを作っていたんだね。子どもたちはみんな家の手伝いをしていたんだ。」

るん太……「ふうん。昔は，子どもも大人と一緒に働いていたんだね。」

クロ……「それに安仁屋の人は，もっと苦労したんだよ。例えば，台風でさとうきびが折れたり，稲なども倒れてしまい，なかなか作物ができなかったんだよ。安仁屋ではお金をかせぐことがあまりできないため，昔から外国に働きに行ったりしたんだ。」

二人は，次の神山に向かうことにした。

⑥ の 場 面

⑦の場面［家や畑に囲まれて話をしている様子］

クロ……「ここが神山だよ。」

るん太……「あんまり安仁屋と変わらないんじゃない？」

クロ……「神山は，450人ぐらいの人が

住んでいて，子どもたちは学校へかよっていたんだ。葉っぱやたきぎを使って火を起こし，米を炊いたりしてたんだ。」

るん太……「僕のおばあちゃんからも聞いたことがあるよ。」

クロ……「神山は，僕らの時代にはないよ。普天間基地のほぼ真ん中にあるんだ。あっ！そうだ。るん太，並松に行く？」

るん太……「ナ・ン・マ・チ？　なにそれ？」

クロ……「まあまあ，行ってみれば分かるよ。行こう！！」

⑦ の 場 面

⑧の場面［並松を見上げている場面］

るん太……「うわあ，すごいな，この通り。クロ，いったい何なんだ？この大きな木は。」

るん太の目の前には大きな松の木が何本も並んでいた。

クロ……「るん太，この道は，首里の王様が通るためのものだったんだ。村の人たちが松の木を植えて，育てたんだよ。普天間神宮から首里城まで続いているんだよ。」

るん太……「へぇ，すごいなあ。今でもその松の木は，残っているのかな？」

クロ……「いや，戦争で使われたし，また，アメリカ軍の基地をつくるために全部切ったから，残ってはいないよ。そうだ！るん太。この先に市場があるんだ。行ってみないか？」

市場があると聞いたるん太は，うれしくなった。

市場には，野菜やイモ，サトウキビなどが売られてあった。るん太は，ほとんど初めて見るものばかりだった。

るん太……「みんなバラで売っているんだね。」

クロ……「そうだね。るん太の時代でいうと，フリーマーケットかな？」

⑧ の 場 面

⑨の場面［市場のなかでツルに出会う場面］

ツル……「ヤーヤ，ターヤイビーガ？」

小さな女の子に方言で呼び止められ，るん太はとまどった。

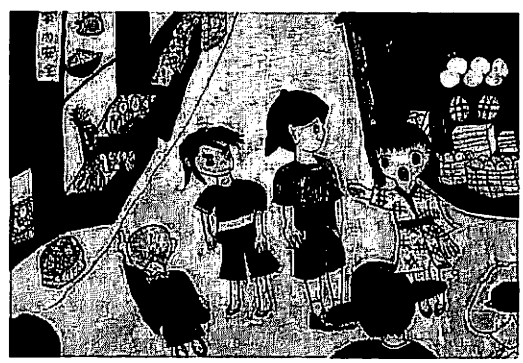
るん太……「ク，クロ。なんて言ってるの？」

クロ……「君は，誰？って聞いているんだよ。」

るん太……「僕，るん太。こっちはクロ。君は？」

ツル……「ワンネー，ツル。」

るん太……「なんて言ってるの？」



⑨ の 場 面

クロ……「私はツルって言ってるんだよ。」
るん太……「じゃあ，一緒に遊ぼうよ！」
　早速，るん太たち３人は，駄菓子屋へ行ってお菓子を買って食べたり，軽便に乗ったりして楽しんだ。また次の日も会って，エイサーを教えてもらったり，神山の網引きをしたりして過ごした。

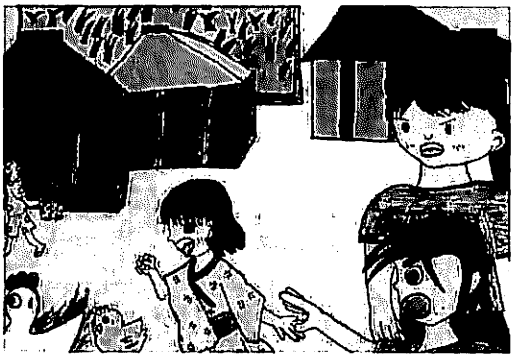
⑩の場面［掲示版をみながら話している場面］

るん太……「ねぇ。何かお知らせが書いてあるよ。」
ツル……「あぁ，それはね。宜野湾村の一年間の行事だよ。」とツルが言った。
クロ……「えーっと。一月は，初チウビー。三月は，サングヮチャー。六月は，六月ウマチー。七月は，エイサー。」
るん太……「けっこう，いろんな行事があるんだね。僕らの時代にも，残っているよね。」
ツル……「るん太，僕たちの時代って？」
クロ……「ううん，なんでもないよ。」

⑩ の 場 面

⑪の場面［怪しい人を追いかけている場面］

　民家から怪しい人が出てきた。
ツル……「あっ，待てー。」
　突然ツルが走り出した。
るん太……「どうしたの？ツル。」
ツル……「説明は，あと。とにかく前にいる男をつかまえて。」
　怪しい人は角を曲がっていってしまった。
クロ……「あー。見失ったね。」
るん太……「ところで，何でツルは，追いかけたの？」
ツル……「あの人，こそ泥なのよ。」
るん太……「こそ泥？」
ツル……「そう。勝手に人の家に入って，物をとったりするのよ。どろぼうなんだよ。」
クロ……「昔も，どろぼうがいたんだ。」
ツル……「ほかにも，おいはぎ事件というのがあって，お金持ちの人の着物ごと，取ってしまう人もいたんだよ。」
るん太……「ひどいことをするんだね。」



⑪ の 場 面

⑫の場面［地図をもらってお守りをあげている場面］

クロ……「ツル，そろそろ僕たち，家に帰るよ。」
　いきなりクロが言い出した。
ツル……「まだまだ，遊びたいのにね。今度，また会おうね。お友だちの印として，これあげる。私が作ったこの村の地図。神山や安仁屋などものっているし，行くことのできなかった新城などものっているよ。」
　ツルは，るん太に手渡した。
るん太……「じゃあ，また。」
クロ……「今度，また絶対会おうね。さよなら。」
　るん太とクロは，ツルに別れの言葉を行って，歩き出した。

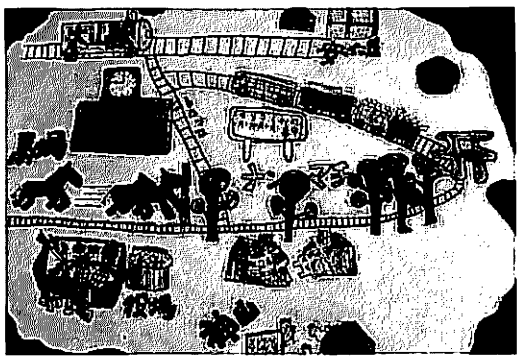
しかし，なんだか，クロの元気がない。

るん太……「クロ，どうしたの？元気ないじゃないか。そんなにツルとの別れがさびしいの？」

クロ……「もちろん，ツルと別れるのは，つらいよ。でも，もっと，つらいのは，この沖縄が戦争にまきこまれるんだ。」

るん太……「クロ，それって，ホント？」

クロは，うなずいた。



⑫ の 場 面

⑬の場面［地図をもらってお守りをあげている場面］

クロ……「このきれいな山も川も，田んぼや畑も，そして，あの並松もすべて，戦争でなくなるんだ。軽便だってそうだよ。そして，たくさんの人が死んでいく…。」

るん太……「クロ，僕は，僕は…どうすればいいの？」

クロは，だまって，るん太を見つめるだけだった。

るん太は，ポケットからお守りを取り出すと，ツルがいた所へ走りだした。

るん太……「ツル!!　僕の大切なお守りなんだけど，これあげる。これからどんなにつらいことがあっても，くじけちゃだめだよ。本当に，また，今度，会おうよ。」

ツル……「ありがとう。このお守り，大切にする。」

⑬ の 場 面

⑭の場面［おばあちゃんと話している場面］

目が覚めたるん太。そこは，自分の家の庭だった。

るん太……「あれっ，ここは，僕の家の庭だ。」

「クロは？！　クロはどこ？」

クロは，るん太のそばで寝ていた。いつの間にかクロは，犬にもどっている。

るん太……「なんだ，何もかも夢だったのか。」

なにげなく，手をポケットに入れると，なにやら，色あせた紙が入っている。取り出してみると，それは，ツルからもらった地図だった。

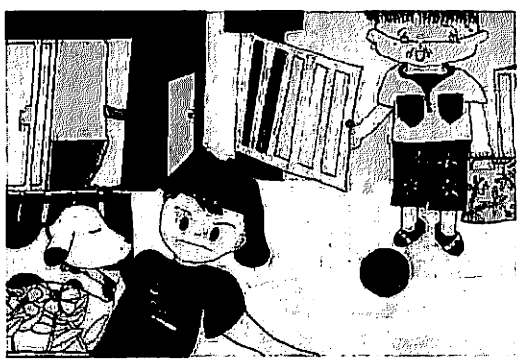
るん太……「やっぱり，夢じゃなかった！」

おばあちゃん…「どうしたの？るん太。大きな声を出して。」

お出かけから帰ってきた，おばあちゃんが声をかけた。

るん太……「おばあちゃん，…あっそれは！何？」

おばあちゃんが持っていたかばんには，るん太がツルへあげたお守りがついていたのだ。



⑭ の 場 面

おばあちゃん…「あぁこれね。これはね，おばあちゃんが子どもの時に，不思議な男の子と出会ってね，その子からもらったものだよ。」

るん太はすぐに気づいた。その男の子が僕であることを。そして，あの女の子が，目の前のおばあちゃんであることを・・・。

⑮の場面［紙芝居を作っている場面］

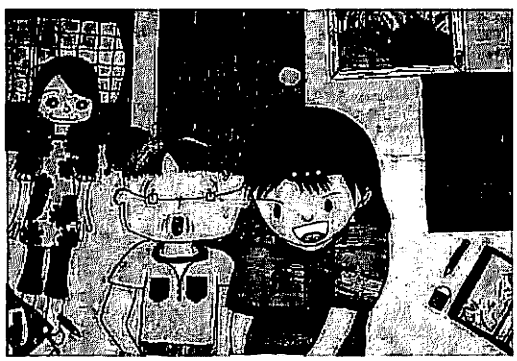
るん太はその不思議なできごとについて，おばあちゃんと一緒に紙芝居でまとめることにした。

お母さん……「あら，何やってるの？　るん太。まあ，おばあちゃんまで…。」

るん太……「紙芝居を作ってるんだ。完成するまで見たらダメだよ。」

お母さん……「あら，そう。じゃあ，お母さんは，夕飯のしたくをしておくわ。」

完成した紙芝居というのは，実はこの紙芝居なのです。おわり。



⑮ の 場 面

このお話は，るん太とクロが，普天間基地がつくられる前の宜野湾村にタイムスリップした探検でした。軽便鉄道，松の並木，市場のにぎわい，のどかな農村風景がみられました。基地に消えた宜野湾村ですが，いまを生きる私たちは，決して忘れてはいけないことだと思います。最後まで，私たちの紙芝居を聞いてくれて，ありがとうございました。

合作詩

昔の宜野湾

いまの宜野湾とちがう村。
そこには，不思議な出会いがまっている。

たくさんの松。
たくさんの畑。
たくさんの泉。
みんな助けあってくらしていた。
軽便鉄道。
市場のにぎわい。
ひとびとは，平和にくらしていた。
おじいおばあは，みんなに伝えていく。
豊かな村だったこと。
いくさがあったこと。
そしていま　生きていること。

いまでは基地に消えてしまった。
基地のある場所には，村があった。
「宜野湾村」
基地ができて，村が消えた。

いつの日か
あの村にしずむ夕日をみたい。

9．むすび－宜野湾村の姿に迫った子どもの学びとは何か－

足かけ10ケ月に及ぶ「総合学習」のテーマ「基地に消えた村」を子どもと共に追究してきた。普天間基地のなかった頃の沖縄，当時，宜

野湾村と呼ばれていた戦前の村に焦点をあてた「総合学習」の展開であった。本稿の冒頭に記した通り，このテーマを進めてきたのは，村に生きる人々の生きざまに迫り，基地に呑み込まれた村人の姿を子どもの視点から再生することで，子どもの郷土・沖縄に対する思いや願いを深め，地域への愛着心を育みたいと考えたからである。子どもは個々のテーマを追究していく中で，事実関係をとらえ，整理してきた。例えば，これらを箇条書きにして記すと次のようになる。

○戦前の宜野湾村には，闘牛場・馬場，サーターヤー，共同の泉，ウタキなどがあり，それらはそこに住む人々の娯楽であったり，生活を支えるものであった。また，琉球並松で有名な「並松街道（ナンマチ）」が普天間宮から首里までのび，観光地としても知られていた。

○軽便鉄道が村内を走り，大山駅は有人駅であった。軽便鉄道について調べている中，昭和天皇の「お召し列車」の車掌は古波蔵恵昭さんの実父であったことも証言として得られた。また，「沖縄には駅弁がなかった」という考え（金城功）があるが，子どものインタビュー調査によれば，「駅弁を食べた」という証言もあった。沖縄の軽便鉄道に「駅弁」があったのかどうかについての確かめは十分ではなかったが，これは，今後のユニークな研究課題である。

○宜野湾村と一口に言っても，そこには様々な集落（字）があり，生活の姿があった。一様には語れない，集落の姿であり生活を営む人々の姿であった。その中でも，子どもが追究してきた神山や安仁屋の集落では，村人の素朴な生活の姿が浮かび上がってきたが，普天間基地が誕生・形成されたことで，まさしく「基地に消えた村」となった。これと関連して，普天間基地は，遙か昔から存在するのではなく，先の大戦の結果として基地があることを子どもたちは実感した。

例示的に学習テーマの内容と関わっての「学び」を挙げてきたが，子どもたちは，「基地に消えた村」を追究していくことで，地域住民と直接関わることの大切さを実感し，より深い学習を進めるためには，地域の方々への「質問する力」が重要であることを述べている。

□まず一つは，インタビューする力。質問のしかたとかが身についてきたと思います。二つ目は，資料などではわからないことを追究していくので，学習を楽しくやるという力が身についたと思います。（みちる）

□人に会ってインタビューしたり，テープを聞いてまとめたりすることや，電話のかけ方も上手になった。（あやか）

□インタビューする力や，実際に神山があった場所に行ってみたりして，資料を手に入れる力が身についてきたと思う。（すぐる）

□インタビューする力や，考えていた質問だけではなく，その場で質問をする力などが一番身についたと思います。（ひろか）

子どもは，元村民の生きた証言を聴き取り，これらをつないでいくことで村の姿を描いてきた。子どもが最も頼りとし，アクセスしやすい情報源は，元村民の証言であり，博物館職員の話であった。確かに，市史関係書については取り寄せ，子どもでも読みこなせる部分については提供したが，やはり，全体的に子どもにとっては難解であった。

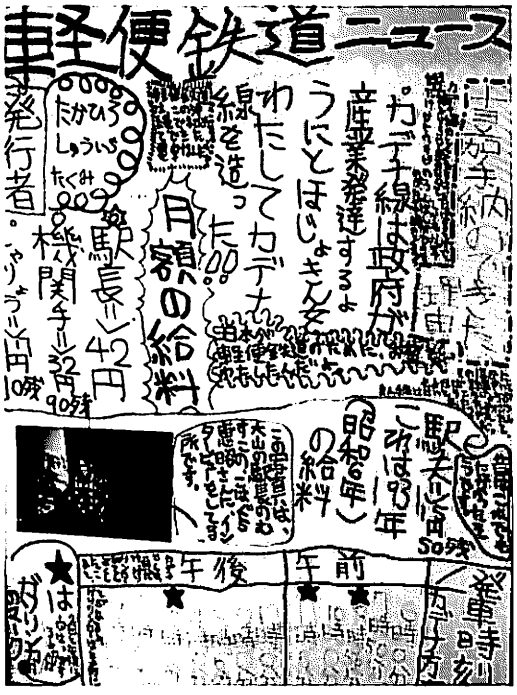
こうした地域の方々からの証言を収集し，学級に持ち寄り，討議し，さらに証言をつないでいくという地味な活動が，今回の「総合学習」の中心的な活動であった。個別の学びは，ポスターにまとめ（次頁，参照），セッションを開いたりすることで，学びの共有を図り，まとめは，「大型紙芝居」に集約した。「大型紙芝居」のエピローグは，「昔の宜野湾」という合作詩である。この詩では，自然に恵まれた村民は，

けして豊かな生活とはいえなかったが助け合い，支え合い，平和に生きていたことをうたっている。宜野湾村は基地に消えてしまったが，子どもたちは，「いつの日か あの村にしずむ夕日をみたい」と締めくくっている。この文言は，テーマに迫り，学びを深めてきた子どもたちの郷土・宜野湾村に対する思いであり，願いの表出であるととらえてもいいのではないかと思う。

※

今回の「総合学習」を進めるにあたり，子どもの聴き録りに快くご協力を頂いた方々や広範囲にわたる調査だったゆえ，保護者の送迎協力は不可欠であった。感謝申し上げたい。また，「財団法人ちゅうでん教育振興財団」の研究補助金を受け，有効に活用させて頂いたことを記したい。

〔子どものポスター〕



軽便鉄道ニュース

今はもうない安仁屋の最新情報